



私の歩いた山々

奥秩父

私の歩いた山々

「奥秩父」(地域研究)



奥秩父・西の名峰 金峰山 (西側のハイマツの稜線から見る頂上)



奥秩父・東の名峰 雲取山 (山頂・三角点から…遠景は冠雪した富士山)

私の歩いた奥秩父の山々

一、奥秩父の山々

二、奥秩父の西の雄・五丈石の「金峰山」

瑞牆山荘〜「金峰山」

大弛峠（大弛小屋）・朝日岳〜「金峰山」

里宮平〜「瑞牆山」

金峰山荘から「金峰山」

金峰山荘から「小川山」

三、奥秩父・秘境といわれた「国師ヶ岳」

大弛峠から「北奥千丈岳」「国師ヶ岳」

「国師ヶ岳」から「甲武信ヶ岳」へ縦走

四、奥秩父の要・中核の「甲武信ヶ岳」

千曲川源流から「甲武信ヶ岳」

雁坂峠から「破風山」・「甲武信ヶ岳」

五、奥秩父の代表的な峠「雁坂峠」

雁坂から「雁坂峠」「破風山」

六、奥秩父・「笠取山・唐松尾山・飛竜山」

将監峠から「唐松尾山・笠取山」

丹波・のめこいの湯から「飛竜山」

七、奥秩父の東の雄・都の最高峰の「雲取山」

三峰神社から「雲取山」・「飛竜山」

鴨沢から「雲取山」・「天祖山」日原

大ダワ「雲取山」・「鷹ノ巣山」日原へ

富田新道から「雲取山」・大ダワ・日原へ

八、奥秩父周辺の「大菩薩」・「両神山」

介山荘ベース 大菩薩峠・小金沢山

上日川峠から「大菩薩峠」

秩父の山：日向大谷から「両神山」

一、奥秩父の山々

奥秩父の山々は、地味ながらいわれのある山域だ。近代登山の黎明期となる明治後半から大正にかけ、この山域をこよなく愛し歩いた「田部重治」「小暮理太郎」などの先人が、その魅力を世に知らせている。隣接する大菩薩峠もまた、「中里介山」の小説の題名・舞台として、登山家とは関係のない一般の人々にも知れわたっている。

岩登りや沢の遡行に熱中していた若かりし頃の私には、奥秩父や大菩薩の山々は、ほとんど関心がなかった。奥秩父の渓谷・沢登りは、明治の先人たちに絶賛されていたが、私たちの時代はさほど注目されていなかった。やはり、東京からの地理的なハンデがあったのだろうか。

このため、私の若い頃のこの山域の思い出は、高校の友人との三条の湯・雲取山・石尾根の山行や、大菩薩峠の山行しかない。自動車での行動力と自由になる時間を味方につけた退職後の私には、奥秩父は真っ先に研究対象（地域研究：特定の山域の登山Ⅱ実践と記録Ⅱ理論）となった。

登山を再開した翌年・二〇〇六年に「奥秩父プロジェクト」として、春から秋にかけ集中登山した。大菩薩の山域

も、富士山や南アルプスの展望を求めて歩いた。先人たちの紹介で期待していた通りの魅力ある山域だった。

奥秩父は、東は「雲取山」、中央は「甲武信ヶ岳」、西は「金峰山」が注目されている。私も〇六年春からそれぞれの登頂を計画した。

当初、東から順次：の予定が、後山林道の通行止め（三条の湯ベース・飛竜山・雲取山）、青梅街道の氷川と奥多摩湖の間の土砂崩れ（一ノ瀬高原ベース・唐松尾山・笠取山）と、アクセスのトラブルが続いた。

加えて、三峰山のロープウェイが〇七年まで工事で運行停止ときた。計画段階ではそんな予定はなかった。これで、最初に、東からの奥秩父の走破となる「三峰神社經由・雲取山」の山行計画は不可能となった。

「東地区」でのこれらのトラブルもあり、プロジェクトのスタートは、予定とは逆の「西地区」からの走破となる「瑞牆山荘ベース・瑞牆山・金峰山」から始まった。

二、奥秩父の西の雄・五丈石の「金峰山」

●「金峰山（きんぼうさん・きんぶさん）」

金峰山は奥秩父の西の雄として、深田久弥の「日本百名山」にも名を連ねている。そのなかで、奥秩父の先人、小暮理太郎の「金峰山」への賛辞を紹介している。金峰山へは四ルートある。登ったのは、①「瑞牆山荘から大日小屋を経て金峰山」、さらに、②「大弛峠から朝日岳を経て金峰山」、③「廻り目平・金峰山荘から金峰山」の三コースだ、いまだ計画のままは、④「水晶峠から御室小屋を経て金峰山」である。金峰山をまさに東西南北から登る十字のルートとなる。(写真上…金峰山・山頂、同下…砂払いへの稜線)

●「瑞牆山（みずがきやま）」と「小川山」

金峰山の周辺には、奇岩の山として有名な「瑞牆山（日本百名山）」がある。①を登った折に、瑞牆山荘から瑞牆山にも登った。さらに、特定の人達（岩登り）には知られている「小川山」がある。小川山は、③を登った折に、金峰山荘に泊まって翌日登り、「廻り目平・金峰山荘」ベースの金峰山と小川山の登山を実行することができた。金峰山荘は川上村の経営で、なかなか素敵な山宿である。



瑞牆山荘から「金峰山」(二〇〇六年五月二二・二三日)

「秩父プロジェクト」のスタートは、晴天の予報を狙い、五月二二・二三日となった。初日に「里宮平から瑞牆山」を登って瑞牆山荘(写真)に泊まり、二日目に「山荘から大日岩を経て金峰山」に登った。

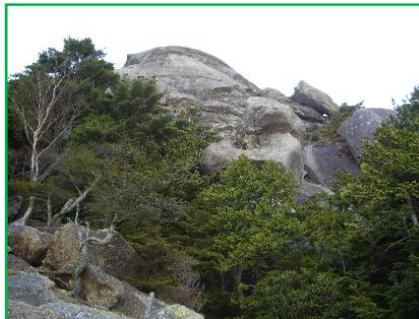
●瑞牆山荘から大日岩・大日小屋

朝の四時に起床、山荘の朝食は六時からというので、前日作ってもらったおにぎりを食べる。四時半に寝静まっている山荘を出発する。ガイドの所要時間では朝六時出発でも午後二〜三時には下山できるとは、なるべく早く着いて、塩山方面へ「ケリスタルライン」：山岳林道の繋がりを車で走りたいと思っているのだ。昨日、小屋の主人に聞いて「林道の崩壊や工事通行止めは無く通行可能」と確認済みだ。



夜明けのひんやりとした霧囲いのなか、富士見平まで順調に行く。夜中に何度も目が覚めて「寝不足気味」の心配があったが、体調は悪くない。富士見小屋の右手のトイレ近くから金峰山への登山道が始まっていた。若い登山者が先行していった。

この分岐から一時間、森林帯を登ったり、巻いたり、と快適に進む。ガイドの時間通り大日小屋に到着、岳樺の林がきれいだ。やはり予定通り三〇分少しで大日岩(写真)へ到着した。岩の基部で眼下に広がる麓の「乙女高原」や、前衛の「茅ガ岳」方面を見ながら、朝食の「おにぎり」を食べ、添え物の「沢庵」をかじる。気持ちのいい場所だ。



元気のいいご夫婦が追い越していった。(ガイドではここから森林帯を一時間、森林限界を出て稜線を五〇分で、千代の吹上げ・五丈岩・金峰山頂上へ行くことになった)。しかし、結果的に順調なのはここまでだった。

●砂払いの頭・稜線から金峰山・山頂まで

八時三〇分、森林帯から突然に空が開け、前方に空間が広がった。岩混じりの稜線に飛び出し展望が開けた(この辺を砂払いの頭というらしい：大日岩を七時二〇分出發・ここまで一時間一〇分かかる)。森林限界を超えているのだらう、背の低いダケカンバとハイマツが稜線の左(北側・長野)になだらかに広がり、右(南・山梨)は険しい岩峰・崖となっている(写真)。稜線はいくつかの岩峰が連なり、その先に大きな岩峰(五丈岩)があり、山頂が続く。砂払いの頭からの見通しはいいが、山頂はまだまだ先にある。

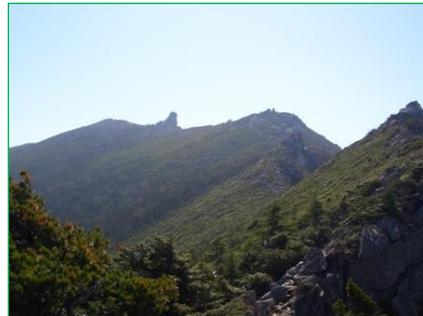


実は、この森林限界を超えたハイマツと岩の連なる稜線を辿る道が意外と厳しい。岩登りとまで言わないが、巨石が続く登りは手・腕・脚全体を駆使しなければならぬ。太陽が真上に近づいて非常に暑い。完全に夏山の縦走の雰

囲気だ。暑さと長丁場の登りでバテを感じ始める。頂上が見えているのになかなか近づかない(写真：山頂への稜線・突起が五丈岩)。八時半に稜線に出て、三〇分オーバーの九時五〇分にやっと着いた(大日岩の二〇分休憩のぞき、合計五時間かかった)。

●金峰山・山頂

山頂は三六〇度の展望。昨日とは違い、南アルプス方面は雲がたなびき、雪の稜線は見えなかった。しかし、奥秩父の「国師ヶ岳」・「甲武信ヶ岳」の東へ向かう主脈縦走路、振り返れば「小川山」や昨日登った「瑞牆山」などすべて見えた。北側の足もとは金峰山小屋、その先は、はるか下に「廻り目平」や川上村の高原野菜畑が遠望できる。素晴らしい山頂だ。



頂上には、富士見平であった若い登山者が撮影に熱中していた。山頂の岩のピークにいた、別の若い方に写真をお

願いした。私とほぼ同時に、金峰山小屋から山頂に着いたという方は、新潟の方で私と同年輩の様子だった。一眼レフのデジカメで、写真好きな方なのだろう。

岩のピークからやや下の五丈岩（写真）に近い岩畳で食事する。山荘で作ってもらった「おにぎり」だが、疲労のせいもあり食欲がなく、無理やりの「エサ」という感じになってしまった。



●金峰山小屋経由で戻る

下りは、先行する人（例の写真好きの方）がいたこと、あの岩道を今度下るのかと考えると嫌気がさし、直接、金峰山小屋へ下り、巻き道から縦走路へ戻った。森林帯ではアイゼンを履くほどではないが、かなりの雪がまだ残っていた。景色は無いが暑さよけにはなった。途中から稜線に出て、再び、砂払いの頭までの岩場の道を、全身を使って慎重に下った。

砂払いの頭から森林帯に入ったところで、昨夜山荘で会話したご夫婦と出会った。今は丁度一二時。何時に山荘を出たのだろう。車を駐車場に止めてあるとのこと、これから山頂を往復はともムリと思えた。展望の開ける「砂払いの頭」辺りで、引き返したほうがいいと助言した。

森林帯の下りは、この季節、カラマツなどの新緑がともきれいだ。ただ黙々と下り続け、大日岩を通過し、大日小屋のキャンプ地の広場で、残りのおにぎりを食べる。一二時五五分出発。一三時時四〇分に富士見平着、山荘には一四時二〇分の到着。朝早かった分、長い一日だった。

●日帰りの湯「増富ラジウム温泉」

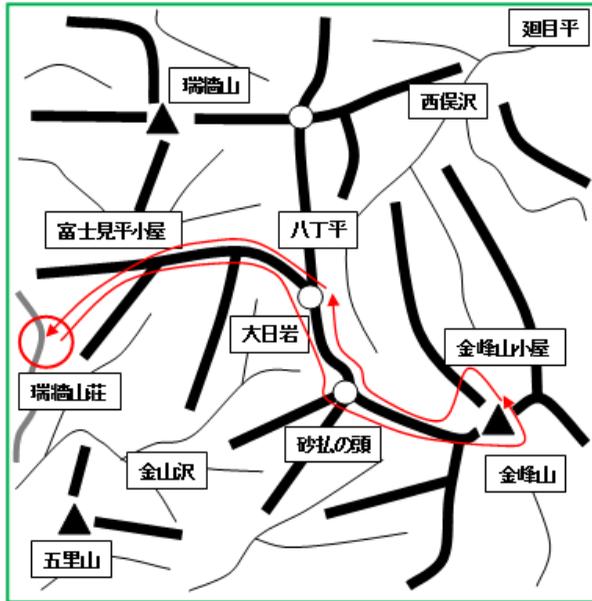
下山後に、着替えなどで時間を食い、クリスタルラインで窪平に行き、雁坂トンネル経由で花園ICの計画は中止にした。その代わり、かねてから気になっていた「増富ラジウム温泉」（日帰り入浴施設）に入って帰ることにした。

【私の記録】

<瑞牆山荘から「金峰山」…2006. 05. 22>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

往路…瑞牆山荘=4.30—(0.50)—富士見平小屋=5.20—(1.00)—大日小屋=6.20—(0.40)—大日岩=7.00~7.20—(1.10)—砂払いの頭=8.30—(0.30)—千代吹上=9.00—(0.50)—金峰山(2595m)=9.50~10.30

復路…金峰山=10.30—(1.00)—千代の吹上經由砂払いの頭=11.30—(0.50)—大日岩=12.20—(0.20)—大日小屋=12.45~55—(0.45)—富士見平小屋=13.40—(0.40)—瑞牆山荘=14.20

大弛峠から「金峰山」 (二〇〇六年八月二・三日)

「秩父プロジェクト」として再び金峰山を訪れたのは、八月二・三日だった。初日は「西沢渓谷・国師岳」を遊歩し、二日目に「大弛小屋・金峰山」に登った。

●大弛小屋から朝日岳

朝・五時半には食事の準備ができていた。朝食もまずまず(納豆は遠慮した)。誰よりも早く小屋を出発(六時)。峠の駐車場近くに、金峰山登山口(写真)がある。そこまで小屋主が見送りしてくれ、天気が良くなれば縦走路右手に「浅間山」が見える……と教えてくれた。甲武信ヶ岳への稜線も見えればいいが…。



体調を確かめつつ、樹林帯をひたすら登る。先般の「飛竜山」の時もそうだったが小屋泊りの翌日は、眠りも食事も充分なので調子がいい。朝の森の道はすがすがしい。樹

木は「ブナ」でなく標高的に「シラビン」(写真)のようだ。シラビン特有の「立ち枯れ状態」も見られるので間違いないと思う。ただ、私にはいまだに「シラビン」と「オオシラビン」の区別はつかない。

大弛峠から三〇分ほどで「朝日峠」につく。単に縦走路の鞍部で、何にも無い峠だ。ガイドではここから三〇分で「朝日岳」、さらに一時間半で「金峰山」とある。展望も無いので休まず、朝の涼しい時間帯に距離を稼ぐことにした。

●朝日岳手前の岩場・展望台

朝日峠からまた緩やかな登りが続く。朝日が差し込む稜線の右手の展望(浅間山や甲武信ヶ岳方面)は相変わらず霧・雲の中で残念だ。しばしの登りが続くと、突然、展望の開けた岩場になる。近くの山並みが下界の雲間から見え、雲の上にかすかに富士山がみえた。その右手には南アル



プスの連山（写真）が見えていた。この岩場で三脚付の大型カメラで写真を撮り続けている人に出会った。今朝三時に峠に来て、夜明け（「来光？」から写し続けているという。冬場も来るといふから、多分プロか余程のマニアなのだろう。山ではいろんな人に出会える。



この岩場は山頂ではなく、一〇分ほど行くと朝日岳の山頂となる。山頂の東側は開けており、位置的には、金峰山への稜線・山頂の五丈岩が見えるはずだが、このときは霧・雲の流れの中にありみえない。今日の山頂での展望は望めないかもしれない。朝日岳の下りには、シラビソの立ち枯れが多かった。北八ヶ岳にもこんな光景がある。なんとなく寂しげな景色だ。何故こうなるのか…これを機会に調べてみたい。

● 鉄山のまき道から、森林限界のガレ場に

朝日岳（二五七九m）と金峰山（二五九五m）の標高差

を考えると、この間の一時間三〇分の所要時間は、上り下りより、距離を稼がなければならないことが想像できる。朝日岳を下る（七時二〇分）とまた樹林帯の道を行く。まだ暑さが気にならず快適な歩きが続く。鉄山への分岐（七時五〇分）の標識を過ぎると、まき道らしく水平の道が続く。しばらくして今度は登りが続き、苦しくなり、暑さが気になり始めると、ひよっこりガレ状の稜線に飛び出る（八時二〇分）。

ガレ場に出たては、ガスで展望が開けていなかったが、急にガスが切れ始めた。東側の国師方面はまだだが、西の金峰山方面は一気に青空が広がった。ここから見えるピークはまだ金峰山の山頂とは思っていなかった（五丈岩は東からは見えない）。ガレ場にはケレン



（石を積み上げたもの）が数個か作られていた。稜線を快適に進む。先のピーク（写真）が金峰山・山頂で、ガレ場の稜線に出たからはずだった。

●金峰山頂・素晴らしい展望

金峰山は二度目の登頂となる。今回も天気は抜群に良い。先ほどまでの霧・雲??:は、それこそ霧散した。富士山は見えなかったが、足元に広がる乙女高原から、遠くに霞む南アルプス、さらに右手に八ヶ岳連峰が望まれる。金峰山・山頂から西側には、今年五月に苦勞して歩いた「千代の吹き上げ」「砂払いの頭」(写真)「大日岩」、そして「みずがきの岩峰」、端正などっしりした「小川山」など…。

今回初めて見るのは金峰山から国師ヶ岳、甲武信ヶ岳に続く、東方面の奥秩父主脈縦走路だ。山頂からの東の肩にあたるガレ場にはケルンがそこかしこに積んであったが、ハイマツの緑と、岩場の茶褐色と紺碧の空と(写真):見事なものだった。その先は、なだらかな北奥千丈岳と左に少しとんがった国師ヶ岳の山頂(写真・下)が続く。その先の稜線は霧の中で見えなかった。



●山頂から大弛峠まで

これだけ天気がいいと去りがたい。昼飯には早すぎる。予定通り九時には出発。来るときはガスの中だった、ガレ場の末端からは、小川山の左右の稜線や、右端の岩峰群・岩場(有名なロッククライミング場)が見え、その先に川上村のレタス畑のビニールの反射光がみえた。



朝日岳は傍若無人な団体客が居るので敬遠、先の展望岩場で、仕込みの山菜御飯(水を入れただけのアルファ米)の昼飯とする。あまり上等ではなく半分で終わらせる。帰りのこの展望岩場からも期待していた国師ヶ岳から甲武信ヶ岳への稜線は、今日一日、霧・雲がかかり明瞭には見えなかった。

●道中で出会った人たち

今回のコースは往復なので、金峰山・山頂で後発の大弛

小屋の同宿の二人（名古屋・横浜）と出会い、帰り道で、大宮の方に会う。さらに鉄山付近で、小屋の主人と二人中学生たちに会う。その他に、峠から金峰山に向かう個人やグループに多くであった。山頂であった若者は、廻り目平らから、大弛峠へバイクで上り、金峰山を往復しているのだという。このコースは、便利なので平日でも多くの登山者が来るようだ。

喧騒の団体登山者たち：めずらしくひどい連中に出っくわしまった。中高年の男女十数人のグループだ。モラル・ルール無視の連中。コースの便利さ樂さが、迷惑な人たちも呼び寄せてしまう。

●日帰り温泉「花かげの湯」・帰りの行程

今頃は「桃の季節」、牧丘林道・柚口林道沿いには、桃の果樹園が続いていた。カミサンからお土産として買うように言われていたので、昨日調べておいた、窪平の道の駅「まきおか」で買う。ここで花かげの湯の場所を聞く。

公営・花かげの湯（写真・下）に立ち寄りする。道の駅で買い物し所在地を聞いたら百円割引のパンフをくれた。三時間・五〇〇円からの一〇〇円割引で、公営でも高い入

浴料のところが多いのに：なんとなく嬉しくなった。温泉はまずまず、露天風呂もいい。時間的に地元のお年寄り数名で、ほぼ独占状態。さっぱりとした。

続いて、カミサンへのゴマすりの意味も含め、何度か来ている「勝沼ぶどうの丘」のワイン販売所に立ち寄り「地元ワイン」の白・赤を買う。この後、勝沼ICから、中央高速で高井戸まで

一時間、高井戸から中村橋まで下で一時間、夕方の五時前には帰宅した。

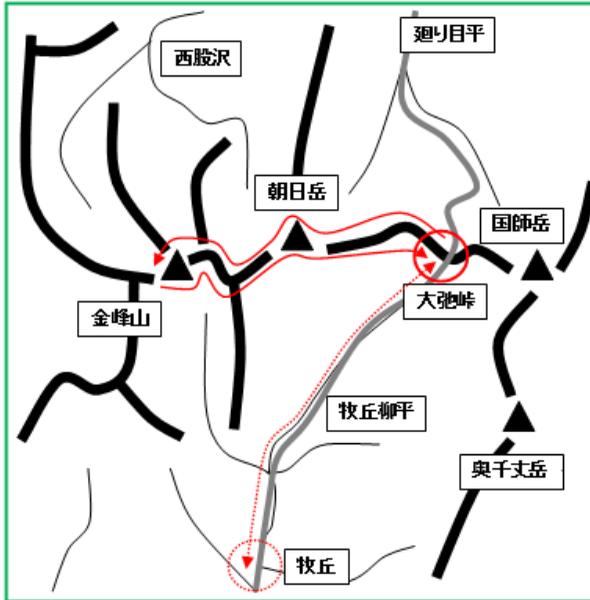


【私の記録】

＜大弛小屋から「金峰山」…2006. 08. 03＞



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

往路…大弛小屋=6.00—(0.30)—朝日峠=6.30—(0.30)—展望岩場～朝日岳
(2579m)=7.00～7.20—(0.30)—鉄山・分岐=7.50—(0.30)—稜線・ガレ場=
8.20—(0.40)—金峰山(2595m)=8.30～9.00

復路…金峰山=9.00—(1.00)—朝日岳・展望岩場=10.00～10.20—(1.10)—
大弛峠・駐車場=11.20～11.30

金峰山荘から「金峰山」 (二〇〇九年六月二日)

●登山口までのアクセス

六月二日、長野県の川上村(廻り目平・毛木平)側からの奥秩父は、何度か来ているので迷いはない。高速道(関越道など)の早割・通勤割を活用して半額で、六時過ぎに佐久ICまで来る。ここから国道一四一号を清里方面を目指して走る。

約一時間で川上村への分岐、そこから三〇分で廻り目平の金峰山荘に着いた。途中レタス畑の広がる処からの八ヶ岳連峰の遠望(写真)と、目前に迫る小川山の前衛の岩峰群が、すつきりしない空のもと、とても素晴らしかった。



都会風のクルマゲートを過ぎて山荘前に駐車、登山の準備をして、予約してあるので山荘の受付へ顔出しする。予約を確認し「今日は金峰山を登る」旨伝えて出発した。

●金峰山荘から登山口(砂防堤)まで

朝食(いつもの赤飯にぎり)を済ませて、計画の八時少し前に山荘を出発。一時間二〇分の林道歩きが始まる。山荘周囲は駐車場や、芝生風のキャンプ場が整備されている。白樺の林が広がり心地よい。四〇分ほどで林道が金峰山と八丁平の分岐(約一八五〇m : 写真)に出た。沢を渡ると金峰山への道となる。ここで後から来た単独者に追い越される(山頂で再会した)。

●登山口から金峰山小屋まで

しばらく沢沿いの傾斜のゆるい道を行く。沢筋から離れると林間の急登が続く。所々に、金峰山小屋名の標高指示板がある。標高二〇〇〇mを過ぎると「石楠花」が群生し始める。ただし、みんな堅い小さいつぼみで、咲くには時間がかかりそうだった。



やや傾斜がゆるくなったところに道標(写真)があり、金峰山小屋まで一時間とある。ここで一休みして行動食をとる。ここからゆるい登りを辿ると、正面の木々の間から金峰山と特徴ある五丈岩の突起が見えた。

見えてから思いのほか時間がかかり、一時間以上掛かって金峰山小屋に着いた。途中

に残雪や雪解けのぬかるみのところもあり、歩きづらかった。小屋前で休憩していると、跡から登ってきた夫婦、上から降りてきた単独者と大勢になった。



●小屋から金峰山・山頂

小屋(多分標高二五〇〇m位)からは森林限界を超え岩混じりの急登が続く。三〇分近く掛かり山頂に着く。写真撮り、東側(朝日岳側)に廻って国師ヶ岳方面の写真を撮り、戻って、西側(みずがき山側)の千代の吹き上げ付近の岩尾根の写真を撮る。今日は快晴ではなく、南アルプ

スや八ヶ岳の遠望は霞んだ状態だった。

西側の少し下の五丈岩の下(写真)で昼食(ヌードル+おにぎり)とする。岩を見上げればかなりデカイ。山頂には大勢の人たちがいた。

今回の北ルート(金峰山荘から)で、金峰山は三度目の登頂、西ルート(みずがき山

荘からと東ルート(大弛小屋から)を登っているの、残るは南ルート(水晶峠から)だけとなる。奥秩父の「西の雄の金峰山」だけに、「東の雄の雲取山」同様に全ルートを登ってみたいものだ(それに値する山だ)。



●山頂から尾根筋の道標まで

一三時前に山頂を後にする。岩道の下りは歩きづらいが、正面に明日計画している「八丁平からの小川山」の全貌が見渡される。見るところ標高差はさほどでもないが、尾根筋が長く結構時間がかかりそう。二〇分ほどで金峰山小屋

(写真)に着く。団体が休んでいたので早々に通過する。標識のある尾根筋で山頂直前で追い越したご夫婦に会う。一息入れる。ここから三〇分で、分岐に着くとある。途中、最後の水場で顔を洗う。

●林道を山荘まで

分岐について、明日のため、八丁平への道を少し歩いてみる。ガイドではここからの小川山へは破線の表示となっている。踏み跡はハッキリしていて心配は無さそうだ。再び山荘へ向かう林道に戻る。朝方は気づかなかった西俣沢・溪流沿いにはなかなかの景色のところがある。時間の余裕もあるのでのんびりと写真を撮りながら歩く。予定通り一五時過ぎに山荘に着いた。

●金峰山荘(写真・下)の泊まり

何よりも風呂とビール：手続きを済まし部屋に行く個室だ。窓の先は白樺の林が広がる。早速着替えの用意をし



て風呂へ。割と広い浴場に私ひとり。ゆつくりと入り疲れを取る。食堂で生ビール(六〇〇円)をもらい部屋で痛飲。足らずに、持参したウイスキー十さんまの缶詰とともに至福のひと時を過ごす。

食事・ステーキが出た：一

八時に夕食の召集、食堂は満員に近かった(六〇人以上)。なんとステーキが出た。これが結構うまい、感激して又ビール。他のおかずがなんだったか忘れたほどだ。



他の人達との交友・香川からの二〇数名の団体客：食事のときの隣の人が団体さんで、四国・香川から貸し切りバスで来たという(金峰山：日本百名山の探訪)。明日早いで受付でおにぎりをもらう。料金も精算(六八〇〇+ビール)する。明日、小川山に行くという三人組と話し合いし、四時半出発と約束する。

金峰山荘から「小川山」

(二〇〇九年六月三日)

●山荘から八丁平

金峰山に続く六月三日、昨夜は金峰山荘泊まりで二一時頃寝入って、今朝は三時に目覚める。熟睡に近い。それから寢床でぐずぐずして四時に起きる。四時半に山荘を出発。キャンプ場を過ぎた辺りの右手に小川山の登山口が分かれる。昨日と同じ林道を一時間歩く。

すっかり寝たのに、昨日より荷物は軽いのに、身体はだるく足は重い。それでもほぼ同じ時間で分岐についた。ここで河原を下りて山荘の「三個入りおにぎり」の一つを食べる。なかなか喉に入らない。

八丁平を目指して沢沿いに行く。今までとは違い、高巻きルートが多く苔むしていて見分けづらく歩きづらい。途中、今回はじめての石楠花(写真)の咲いていると



ころに出た。喜んで写真を撮る。沢が源流近くなり、樹間の急登を過ぎると急になだらかなところ(大日岩・小屋への道標)に出る。直ぐで八丁平の分岐に出た。

●八丁平から展望岩

八丁平は標高二〇〇〇m前後、小川山が二四〇〇m位なので標高差はたいした事ない。が、ここから山頂まで三時間強と道標(写真)にある。いかに長い尾根道か、想像にかたくな。

しばらくはやや平坦な幅広い高原状(樹木は深い)のところが続く。みずがき山が左手に見える。四〇分ほどで赤テープに導かれ、縦走路の左手に岩場に立つ。ガイドで展望の良いところとある。

天候は高曇りだが、山々の頂に雲が降り始めているか、



麓から湧いてきたのか、厚みを増しつつあるようだ。しかしまだ、南アの甲斐駒から北岳など見分けがつく(写真)。八ヶ岳も権現岳から赤岳・横岳のシルエットが見える。風が冷たい。

このコースでは少ない展望地の一つだが、あまりゆっくりにできず、写真を撮って早々に立ち去る。



●展望台から標高二三〇〇m付近まで

展望台の次が標高二三〇〇mのピーク、樹林帯の登りが続く。何も手入れがされていらない、森が、木々が痛んでいる…という感じだ。自然に痛めつけられたのか、朽ち果てたのか、やたら倒木が多い。登山道を塞いでいるものもある。歩きづらさもさることながら、殺伐とした風景となっている。景色もない、人気もない、ただ黙々と木々を跨ぎ、潜り歩く。標高差はほとんどなく登りのつらさはないが、疲労感が押し寄せる。ガイドで破線なのもうなづける。

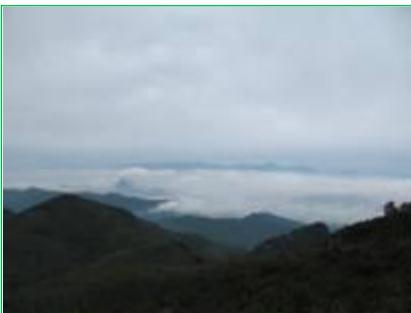
●標高二三〇〇m付近から小川山

八丁平から展望台をへて二時間近く、やや明るい尾根の岩の多いところに出た。ここが小川山山頂手前の展望のいい岩場なのか：標高から半信半疑で通過する。朝方、小川山の登山口で分かれた三人組と、時間的に、ここから山頂までの間で会うはずと考えながら、展望の良い場所を目指す。

●小川山・山頂

標高二三〇〇mを過ぎても展望台の岩場に出ない。一時間三〇分以上歩き続けている。見落としているのかもしれないと思いつつ、高度計は二四〇〇mに近づき、最初の岩場の展望台から歩き通して九時三〇分にひよっこり小川山の山頂に躍り出た。

奥秩父で私にとって最後まで未踏だった「小川山」の



山頂にたどり着いた。ガイドでは、展望はないとされているが、西側に少し行くと岩場があり、南アルプスや八ヶ岳の一部を望むことが出来る(写真・前頁)。もう少し南・西側が切り開かれれば、奥深い静かで、もつともつと人気が出そう。早い日支度を。

●南側(金峰山方面)の展望地

登山口で別れた三人組が一〇時少し前に到着し、少し休んで出発していった。ここが八丁平まで下りみずがき山荘へ行くという。とにかく寒い。防寒着をかぶる。私は昼食を済ませて一〇時過ぎに出発、ガイドの二時間三〇分を目標にする。

登りでは気づかなかった弘法岩・金峰山荘への分岐に出た。このルートが歩きやすそう。幸いなことに薄日が射し始めた。体が温まり上着を脱ぐ。右手に金峰山・五丈岩が時々姿を現す(写真)。



南側が開けたガレ場・岩場でご夫婦に出会う。石楠花が綺麗に咲いているという。ただ、石楠花や灌木の密集地だという。分かれて直ぐこの密集地に突入した。長袖の袖を下ろす。足元さえ見えにくい。だ。

●標高二〇〇〇m付近からの石楠花の密集・開花地

標高二〇〇〇m付近からこの密集と石楠花の饗宴が繰り返される(写真)。分岐までガイドで一時間五〇分とあるが、石楠花に慰められつつも、なかなか着かない。時々開ける南側の展望は、降りてきた尾根筋から派生する岩峰群があり、なかなかの見ごたえだ。石楠花は、数年前の十文字峠の小屋で保護・育成していたのを見て以来だ。こんなにも多彩な色があるとは…。



●弘法岩・分岐から金峰山荘まで

もうそろそろ唐沢の滝コースとの分岐に出そうだと思っ
ていたら人声がする。狭いところで二〇人以上の団体に出
つくわした。こんなに大勢で、これから小川山に行くのか
しら（一二時近い）。この団体と何とかすれ違い、やや危な
つかしい岩場を下ると、やっと分岐に出た。ここから四〇
分、一三時には山荘につく予定。

分岐から二〇分近く複雑に入り組んだ岩場の上り下りが
続く。危険というほどでもないがルートが判りづらい。後
半は岩場もなくなり歩きやすいジグザク道が山荘への林道
まで続いた。さすがに二日のアルバイトで、疲れていたの
か一時間かかった。

● 山荘付近の白樺の美林

山荘のトイレで用を足し、
体を拭いて駐車場に行く。小
雨がぱらつき始めた。着替え
を済ませ一三時三〇分に出
発した。山荘の周辺の白樺林
がなかなか綺麗だ。敷地内の
駐車場・キャンプ場周辺もそ
うだが、ゲートを出て大弛峠



への林道の分岐までの間も白樺の林が続く。こちらは赤松
との混林なので、写真を撮るのに苦労する。今回は緑の枝
葉と白い幹が綺麗に撮れた（写真・上）。

● 帰りルート

山荘から小川山へ早朝
に出発することで、駐車場
への戻りが予定より一時
間以上早くなった。行きと
同じ佐久へのルートを変
更して、廻り目平から三国
峠・中津川林道（写真）を
経て、大滝から花園ICへ
出る。



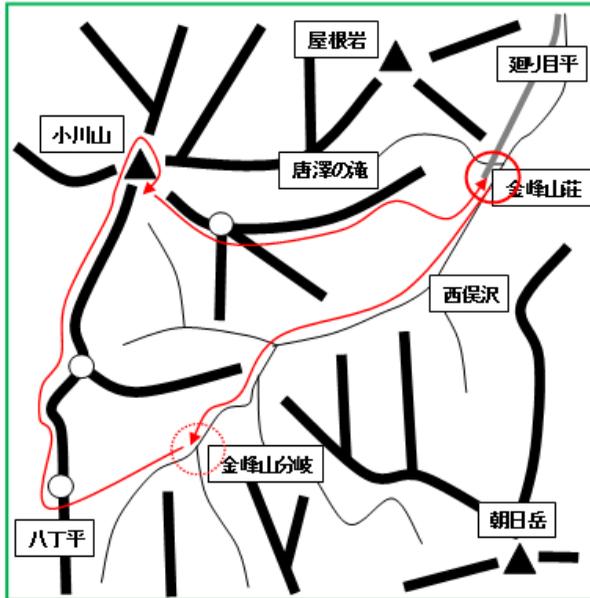
前日に中津川林道が六
月一日から開通している
と確認済みだったし、途中
の梓山で地元の人にも確認した。ダートの林道を慎重に走
り、花園の道の駅で買い物をしてICに一七時少し前に乗
った。自宅へは一八時前に着いた。

【私の記録】

<金峰山荘から「小川山」…2009. 06. 03>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

往路…金峰山荘=4.30—(1.10)—分岐=5.40—(1.20)—八丁平=7.00—(0.40)
—展望岩=7.40~7.50—(1.40)—小川山(2418m)=9.30~10.10

復路…小川山=10.10—(0.30)—南側展望地=10.40—(0.40)—石楠花密集地
=11.20—(0.40)—弘法岩・分岐=12.00—(1.00)—金峰山荘=13.00~13.30

瑞牆山荘から「瑞牆山」(二〇〇六年五月二二・二三)

「二〇〇六年・秩父プロジェクト」のスタートは、晴天予報を狙って、同年五月二二・二三日となった。初日の二日に「里宮平から瑞牆山」を決行した。(注:「環境庁・山梨県」の道標等では「瑞牆」みずがき)

●里宮平・富士見平

瑞牆山荘へ七時三〇分に到着、山荘に立ち寄り駐車場の指示を受ける。八時には出発、私以外にも続々車で到着、登山開始していく。そうだが、今日は日曜日なのだ。今日来て登る人は地元の人みたい。長野ナンバーの車が多いような気がした。

瑞牆山はその特異な風貌(山相:写真)で山好きの人なら誰でも知っている:記憶にあるだろう。私もそうだった。奥秩父山塊の「西はずれの山」で、隣の「小川山」



とともに、主脈縦走路からは少々外れているが、その特異な風貌が山好きを惹きつける。また、この里宮平までのアクセスや広い駐車場なども好まれるのだろう。

駐車場・登山口(写真)

からはカラマツの新緑のなかの緩い傾斜を登る。三時間近い運転の後の登りにはやさしい準備運動となる。山荘や駐車場からの喧騒が遠ざかり、前後のパーティーとの距離調整をすると、いつもの独りの登りになる。

林道を横切り、里宮神社を通ると枝尾根上に出る。ここからは木の間越しに「瑞牆山」(写真・上)のゴツゴツとした岩峰の連なりが見えてくる。カラマツやタケカンバの新緑が朝日に映えて美しい。登山口から五〇分ほどで、人声が聞こえ富士見平(小屋・キャンプ場がある)に到着。かなりの人たちが休んでいた。ここまでの登りでの休憩ではなさそうだ。早出して「瑞牆山」を登って戻り、これか

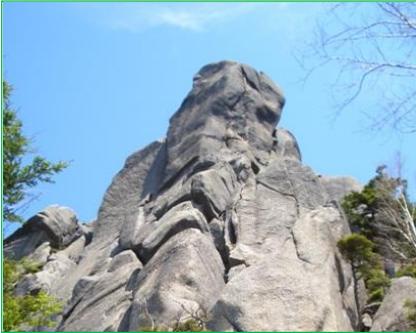


ら金峰山へ行こうという計画らしい。主の居ないザックが幾つかあることからこの人たちも同類かもしれない。

●富士見平から瑞牆山

富士見小屋（写真・右）の横を通り少しの登りから、谷筋へ降りる道になる。対岸に「瑞牆山」の容姿が見えてくる。下りが少しきつくなると、天鳥川にでる。沢筋から南のほうを望むと、稜線に雪を頂いた山がみえた。多分、方角的には八ヶ岳の峰々だろう。

この出会い過ぎから、岩交じりの登りが続く。はしご階段やロープを使う岩場登り（写真・左）など、



変化があつてそれなりに楽しめた。さしたる難しさも、きつさも感じず（∴日差しがきつく、風も通らず暑かった∴）、同じような顔ぶれ・年令の人たちと前になつたり、後になつたりしながら一時間余で山頂（写真・右）に到着した。

山頂での展望は申し分なかった（南アがやや霞かかつて写真写り悪し）。明日予定している金峰山への尾根（写真・左）が見られた。昼には団体らしき若い人たちが到着、着くや否や缶ビールで乾杯を始め、周りの迷惑顧みず一段とにぎやかに（後でへばったり転んだりしても知らないよ）。なんやかやで、狭い山頂が混雑してきた。



私と前後して登っていた人たちは五〇歳台と思われるご夫婦と、私と同年くらいの男性二人（：隣に駐車していた人たちで、話の様子では地元山梨の「御坂山岳会」の人が、混雑してきた山頂の近くに座って話した人たちとなった。ご夫婦も男性二人も結構登っているらしい。

男性二人のうちの一人は、この夏にヨーロッパプスに行く：と話していた。二組とも、ガスコンロを使ってコーヒーやラーメンを作っていた。流行らしい。重いし、面倒でないのかなと思う。

●瑞牆山から富士見平・山荘

混雑の山頂を下山口へ戻ると、今まで見えなかった、金峰山や小川山への稜線が見えた。明日の金峰山への縦走コースはここから見るとかなりの距離に見える。岩混じりの下りは手や腕の力も使った。

一応心配なので、膝サポーターを両方した。登りと変わらない時間をかけた下りとなった。天気がいいせいかわ、汗が滴った。富士見平は朝とは異なり静かな佇まいだった。山荘への道もさしたる苦労もなく四十分ほどで駐車場への到着となった。

●クリスタルライン調査

山荘へは二時ごろの到着、チェックインには早すぎるので、車で「クリスタルライン」を、植樹記念公園（写真）経由で信州峠まで下見することにした。みずかき林道から記念公園への道は白樺の林、新緑のカラマツ林が続き、道路やガードレールも完全舗装され、快適な走りだった。



公園もドライブイン風の管理棟があり広い駐車場・トイレも完備され、さらに広い芝生の広場が広がっている。素晴らしいが、何でもこんなところに：の感がある（天皇陛下か皇太子ご夫妻が来られるとのことで整備したらしい）。

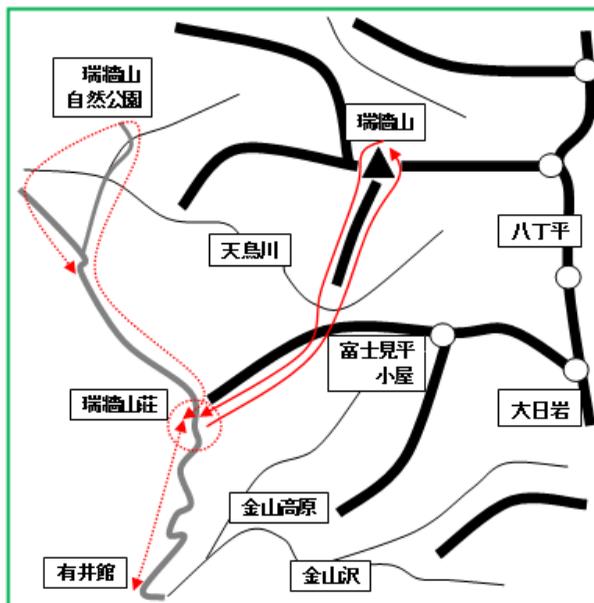
別の方面から見た瑞牆山の風貌・容姿もまたいいものだ。この先は、小川山林道（ダート）に紛れ込み、迷子になって、やっと山荘に戻る（三時三〇分）。

【私の記録】

<瑞牆山荘から「瑞牆山」…2006. 05. 21>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

往路…瑞牆山荘・駐車場＝8.00—(0.40)—富士見平小屋＝8.40—(0.35)—
天鳥川出会＝9.15—(1.00)—最初の岩峰＝10.15—(0.35)—瑞牆山(2230m)
＝10.50～12.00

復路…瑞牆山＝12.00—(1.00)—天鳥川出会＝13.00—(0.30)—富士見平小屋
＝13.30—(0.30)—瑞牆山荘＝14.00

三、奥秩父・秘境といわれた「国師ヶ岳」

奥秩父の最高峰の「北奥千丈岳」(二六〇一m)や直ぐ隣の「国師ヶ岳」は、川上牧丘林道が完成し、山梨側が舗装され、頂点の「大弛(おおたるみ)峠」に駐車場が完備されるまでは、奥秩父の秘境・最深部といわれた地域だ。現在の「大弛小屋」もその当時を思わせる風情だ。

今は、「北奥千丈岳」も「国師ヶ岳」も大弛峠・小屋から「夢の庭園」を経て、標高差三〇〇m、約二時間の周遊コースであり、とても秘境とはいえない。大弛峠は、金峰山への最短のルートの基点としても使われ、駐車場は常に満車状態と聞く。私もここを拠点に、峠の東の「国師ヶ岳」、西の「金峰山」に登った。(写真・上：国師ヶ岳・山頂。写真・下：前国師から国師ヶ岳：なだらかなドームの山頂)。

廻り目平から大弛峠まで林道を徒歩で上り、無人の小屋に泊まり、翌日たどった「国師ヶ岳」から北・東へと「甲武信ヶ岳」まで続く尾根は、いまだ「山」も「岳」もつかないピークが続く、秘境の縦走路と言える静寂さを保っている。田部重治が讃えた「深林の美」がここにはまだ残っている。私が歩いたときは、この縦走路で人に全く会わなかった。何回も歩きたい印象深いコースになっている。



大弛峠から「国師ヶ岳」 (二〇〇六年八月三日)

「国師ヶ岳」には二回登っている。最初は〇六年八月三日、西沢渓谷で遊んでから、車で大弛峠へ走り、大弛小屋の前を通って「国師ヶ岳」に登った。

●西沢渓谷から「川上牧丘林道」で大弛峠

西沢渓谷を予定より一時間早く出発。道の駅「みとみ」で昼の食べ物(おにぎりなど)を探すも食堂しかなかく断念する。広瀬湖を通り一四〇号(雁坂みち)を「窪平」まで戻り、道の駅「花かげの郷・まきおか」に寄る。ここでも飯なし。向かいにコンビニがあることを教わり購入する。

道の駅・コンビニを出るとすぐトンネルに入り、出口からすぐに右折し「杣口(そまぐち)」方面へ進む。坂を登り突き当りを右折、ここからがクリスタルラインの「林道杣口線」となる。左へ「焼山峠・乙女高原」へのクリスタルラインを分岐して、大弛峠への「川上牧丘林道」に入る。

完全舗装の一・五車線の林道を快適に走る。途中で「鶏冠林道」(通行止めだった)を右に分岐し、ここから登りがきつくなる。この日は稜線にガスがかかり展望はきかなか

った。窪平から約一時間で大弛峠(写真)に到着。峠の駐車場は一〇数台分、いつも満車の場合が多いとのことで、一台分の空きを見つけてほっとする(峠を越えたダートの林道にも若干止められる)。

●国師ヶ岳・北奥千丈岳

駐車場で登山準備し、道

標に従って大弛小屋・国師ヶ岳方面へ向かう。すぐにテント用地があり、その先に小屋があった。今日この小屋に泊まるので、立ち寄ろうかと思つたが、まき割りをしていた人が、「小屋主はお客の案内で留守」と教えてくれた。

小屋前から国師ヶ岳・北奥千丈岳を目指す。渓谷歩きの後でやや足が重い。登りの途中に「夢の庭園」への道に分ける。名前に惹きつけられてそちらを辿る。ハイマツとコメツガ(?)の低木帯の中に木の道と木の階段の登山道が続いていた。尾瀬の木道のように環境保護の目的なのか。確かに歩きやすいが、ここまで徹底すると人工的すぎる。



通常の登山道と合流してしばし登ると、「前国師ヶ岳」に出る。すぐ先に「国師ヶ岳」と、その右になだらかな山容の「北奥千丈岳」が見える。ガスがかかったり消えたりとめまぐるしく変わる。北奥千丈岳への分岐から少し登ると、国師ヶ岳の山頂に出た。

●山頂の人たち

大弛峠から約一時間、山頂の展望は、南東側（天狗尾根・北奥千丈岳方面）の展望が開け、西北側（甲武信ヶ岳方面への主脈縦走路）は木立で見えない。山頂には家族連れ（五人）と思われる人たちが休んでいた。登頂記念の写真を頼む。

ここで昼食を取る。展望を楽しんでいると、甲武信ヶ岳から縦走して来たという人が到着、約七時間かかったという。ガイドでは甲武信から国師まで五時間超とのことなので、休みを入れていいペースだ。小屋への戻りに、奥



秩父の最高峰といわれる北奥千丈岳（二六〇一m：写真・上）に寄る。甲武信ヶ岳方面も見えるはずが、ガスのなかでみえなかった。

●宿泊環境・今回は「大弛小屋」

大弛小屋は三〇〜四〇人程度のこじんまりした、昔ながらの、真ん中に通路があり両側に寝る場所のある作りの小屋だった。泊り客は、私と、甲武信から縦走してきた名古屋の人、途中であった大宮の人、素泊まりの横浜の人の四人、国師の山頂であった家族連れは、小屋主と地元中学生の男の子二人、小学生の女の子とその母親だった。泊まりは中学生二人だった。

食事は「牛すき焼き+甲州赤ワイン」で満足（写真は甲武信ヶ岳から縦走してきた名古屋の人とワインで乾杯しているところ）。



追記：西沢溪谷・遊歩

勝沼ICを五時三〇分に降りる。塩山市街を経由し一四〇号線を窪平から広瀬湖へ向かう。「広瀬湖」を通り、その先の道の駅「みとみ」に着き、西沢溪谷入口・駐車場には六時三〇分着。アチコチ寄り道しなければ勝沼ICから約四〇分で到着する。

西沢溪谷・市営駐車場（無料）は東沢山荘（ドライブイン？）前を左に下る。河原沿いにバス・乗用車の広い駐車場がある。シーズンの土日以外は満車にはならないようだ。この日は早かったせいもありほんの数台しか止まっていなかった。戻った時間帯（午前一〇時頃）でもたいして増えていなかった。塩山からタクシーや小型バスで訪れる人も多いようだ。



駐車場から、トイレのある帰路との分岐までは舗装された林道歩きが三〇分近く、その先のつり橋（写真）までは

深い谷となり遊歩道のかなり下に谷筋がある：期待を引く張る四〇〜五〇分の歩きだ。

東沢・鶏冠谷をつり橋で渡る。東沢は沢登りで有名でその道の人には楽しいところだといわれている（ここでは入山禁止の表示）。私が若かりし頃、丹沢や谷川に頻繁に行ったが、奥秩父の谷・沢は計画しなことがなかった。当時のアプローチの長さ、不便さを考えれば当然かもしれない。東沢は（現役のベテランが連れて行ってくれば）一度は遊んでみたい谷・沢の一つだ。

対岸に見える「大久保の滝」から始まり、命名・案内表示された滝や淵・岩が続く（写真）。新緑の頃の明るい谷筋ではもつと水面・流れ・滝つぼ（ここで言う釜）が映えるだろう。今の濃い緑のときでも充分堪能させてくれるが…。紅葉の季節はどんなだろう。バスツアーが多く組まれていることから、やはり



見事なのだろうとおもっ。もっとも相当混雑するらしい。バスの到着する前に巡る計画がいい。今回は、帰りの舗装林道で、これから渓谷めぐりの大勢の人たちと出会っただけで、途中は誰とも出会わなかった。

本命の「七ツ釜五段の滝」は、全体像は残念ながら見られず写真にも撮れない(帰路の林道からも一部分だけしか見えない：写真)。遊歩道から外れて写真スポットを探したが、素人には難しい。結局はそこかしこでよく見る「写真」になってしまった。それでも充分見ごたえはある。コースの最後に見どころがある…というのもいい。



五段の滝・不動の滝を過ぎて渓谷から離れ、急登が続く。木組みの階段登りが続くと、石のベンチのある広場になる。ここが往路・帰路の折り返し点(トロッコ道)らしい。黒金山登山口やその先の「危険表示の道」を確認して戻る。ここで朝食をとる(写真・下：戻り道から破風山方面)。

六・三〇〜八・三〇と往路は写真撮りながら二時間。復路は休みを含めて八・三〇〜一〇・〇〇と一時間三〇分、合計三時間三〇分の行程だった。予定は四時間、帰りの道は歩きやすく飛ばした。

帰って、写真を点検するとボケているものが多い。早春の陽だまりハイクで行った「棒の折山」の白岩谷コースでも同じ現象がおきている。

その後の山筋での写真はちゃんと写せているのに何故だろう。滝名表示の道標までピンボケになっていた。前は寒さのせいにしたが、今回はそうはいかない。谷筋で暗いせいいか、ピントあわせ操作がうまくできていないせいかな、…脇の甘さ？

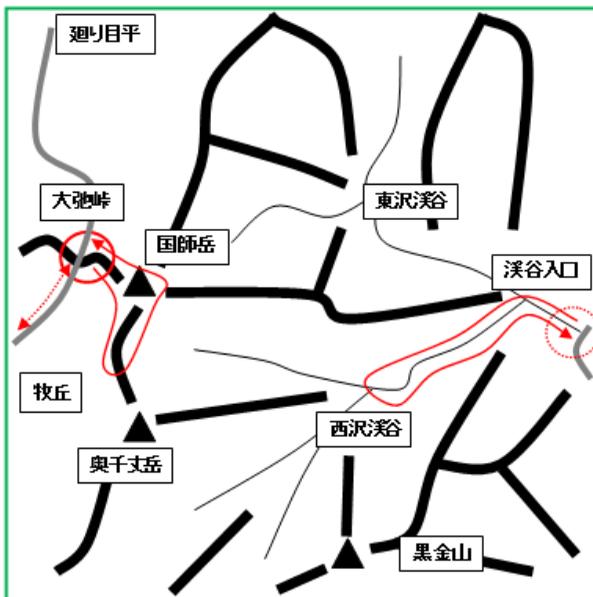


【私の記録】

<大弛小屋から「国師ヶ岳」…2006.08.03>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」…西沢溪谷・周遊

駐車場=6.30—(0.30)—西沢山荘=7.00—(1.10)—七ツ釜五段の滝=8.10—
(0.20)—休憩所=8.30~45—(0.30)—大久保沢=9.15—(0.45)—駐車場=10.00

● 「登山タイム」

往路…西沢溪谷=10.10—(0.30)—道の駅・はなかげ=10.40~10.50—杣口
林道・川上牧丘林道(1.00)—大弛峠=11.50~12.00—(1.00)—国師ヶ岳(2591m)
=13.00~13.30

復路…国師ヶ岳=13.00~13.30—(0.20)—北奥千丈岳(2601m) =13.50~14.00
—(0.50)—大弛小屋=14.50

国師ヶ岳から「甲武信ヶ岳」(二〇〇六年一月二三日)

二度目の「国師ヶ岳」は同年一〇月一二日、廻り目目平から林道を大弛峠まで歩き、小屋泊まりして翌一三日、「国師ヶ岳」から「甲武信ヶ岳」へ縦走し、毛木平へ下った。さらに翌日、クリスタルラインを走った。

今回のこのコースの縦走を成功させるには、登り口(廻り目目平)と下り口(毛木平)の間を、私がどのように移動するかにかかっている。歩きだと四〜五時間、時間不足になる。そこで毛木平・駐車場に車を留め、載せてきた自転車で挑戦した(写真)。

毛木平からすぐは砂利道で苦しんだが、後は快適な下りで「梓山・秋山」を通過、分岐から「川端下(かわはげ)」へは、今度は逆に登りに入る。自転車を押し歩いたり、乗ったりで約一時間三〇分で廻り目目平(川上牧丘林道の起点)に到着した。



●川上牧丘林道の信州側を登る

ガイドによれば、廻り目目平の林道分岐から森林管理小屋まで約一時間、そこから峠まで約二時間とある。自転車を置いて、飯を食べて一三時少し過ぎの出発で、一六時には大弛峠・小屋への到着…のはずだったが、多少の休みを入れたとはいえ、大弛峠着が一七時過ぎと一時間ものオーバーとなった。たかが林道歩きなのに…。

この悪路で名高い林道コースを「徒歩」で登った。前回、大弛小屋の小林さん(管理人)も、注意してゆつくりの運転すれば乗用車でも大丈夫でしょう…と聞いていた通りだった。中高年の夫婦が普通車で私を追い越していった(乗って行きませんかの掛け声を期待したが)。バイクも数台追い越していった。独り「とぼとぼ」と時間を気にしながら歩いていくうちに、なんとなく切ない気持ちになってきた(写真・大弛峠)。



● 今回の宿泊・二度目の大弛小屋

大弛峠の駐車場には、一台しか止まっていなかった。人がいて車中泊らしい用意をしていた。峠のすぐ上の小屋に近づいたが人の気配がなく、明かりがない。無人だったが小屋は開いていた。予約した私宛のメモが置いてあり、管理人（小林さん）は下山していた。連休後の平日、予約が留守電だったこともあり一抹の不安があり、ボンベや食料は余分に持参していたので、今夜・翌朝は大丈夫だ。ビールがないのが残念：電気もつかず早々に寝る。

● 朝食・出発準備

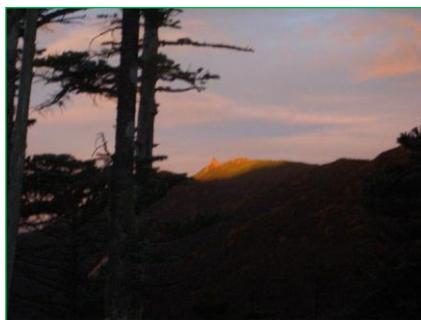
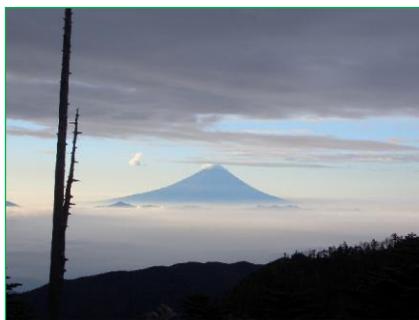
寒くて何度も目が覚める。夜中にトイレで目覚めたとき外に出てみたら雲が出ていた（天候は悪くなるとの予報。明るくなる五時半に出发すべく四時半にはもう起きる。昨日のポットのお湯を使い簡単に朝食を済ます（昨日の残りのおにぎり二個むりやり）。

外に出ると完全な曇り空になっていた。晴れなくていいから、雨だけは勘弁してもらいたいものだ。五時三〇分・予定通り出発。甲武信ヶ岳まで、ガイド所要時間では実働五時間、休憩を入れて六〜七時間の行程だ。

● 北奥千丈岳・国師ヶ岳

今年八月の初旬に、西沢溪谷巡りと同じ日に、国師ヶ岳と北奥千丈岳は登っている。木作りの登山道から振り向くと、写真のように「金峰山・五丈岩」が朝日に輝いていた（写真・右）。

北奥仙丈岳（奥秩父最高峰二六〇一m）の山頂から、西側に当たる金峰山の山頂は見えていたが、既に重苦しい雲が垂れ込めていた。東側はまだ、青空が広がっており、富士山が雲海の上にその姿を浮かばせている（写真・左）。そのずっと左手には、これから行く甲武信ヶ岳・木賊山の稜線が遠望できる。やはり、遠く長い道のりを覚悟させられる。



主脈に戻り、わずかな登りで国師ヶ岳の山頂に出る。国師も北奥千丈もなだらかな山容で、非常に地味な感じがする。ともに景色・展望は良いほうだ（北側だけ見ええない）。

山頂の、甲武信ヶ岳方面を示す道標（写真）も朽ち果てようとしていた。下り口もあり目立たない。さて、いよいよ、ここから未踏の主脈縦走が始まる。平日だし紅葉前のこの季節だし、多分誰にも合わないだろう。「慎重に行こう」と自分に言い聞かせた。

●国師・天狗尾根分岐から国師のタル・東梓

緩やかな下りをしばらく行くと、天狗尾根への、やはり朽ちかけた道標のある地点に付く。ガイドによれば、ここから本格的な下りが「国師のタル」まで続くのである。前回の南ア・北岳の下りで足のツメを痛めているので、靴紐をしつかり締めなおした。



国師のタルまで四〇〇m近くの、急緩を繰り返す下りとなる。森は深く左右の展望も、樹間からわずかに望める程度だ。東に少し開けた樹間から、甲武信ヶ岳と木賊山からの戸渡尾根が望めた（写真・右）。

道は良く踏まれており、歩き難いほどではないが、倒木が多い。人工的に切り倒したものもあるが、自然に朽ちたもの、台風などでなぎ倒されたものなど。故かこの光景が続くと寂しい気持ちになる（樹木のはかない一生？）。

コメツガやシラビソ（多分？）の樹間に、岳樺や楓の紅葉が混じる（写真・左）。まだ艶やかな赤・黄色とは



いえない。多少の色づきに慰められながらも、国師のタルまでの下り、東梓への登りを黙々と歩く。東梓の手前のピーク（無名三角点）に騙される。ほぼ三時間かかつて、すかに読める「東梓」の看板のあるピークに着く。

●この縦走路のピークには「山・岳」が付かない

この「東梓＝二二七一m・三角点」も、この先の「富士見＝二三七三m」も「水師・ミズシ＝二三九六m」も、「○山」「○岳」といった名称が付いていない。何故だろう（「両門の頭＝二六二二m」は直下の溪谷の両門の滝から来ている良くある名づけだから理解できるが）。山頂らしい突起のある山容でないせいなのか。奥秩父の先人の「田部重治」や「原全教」の記述にもでてこない。奥秩父の東部山域には似たような山が沢山ある。「飛竜山・大常木山・竜喰山・唐松尾山」「古札山・水晶山」など、標高や山容、展望など、ほとんど同じだ。だが、こちらはちゃんとした「山」名称がある。

●両門の頭から富士見・水師、千曲川源流への分岐

国師ヶ岳山頂からはじめて開けた展望を得られるのは、この「両門の頭」だ。右は金峰山から朝日岳・大弛峠、国

師ヶ岳の稜線（写真・右）、足元の笛吹川西沢（例の西沢溪谷）の深い切れ込み、対岸の黒金山の稜線、左は甲武信ヶ岳・木賊山までの展望が開ける。写真撮影・エネルギー補給をして出発。この下りから樹間の道でもわかるような雨の降りになってきた。

両門の頭から「富士見（のピーク）」の登り下り、さらに「水師（のピーク）」の登りがさすがにつらい。ただ、紅葉が始まっており、その色合いを楽しみ、朽ちた木やコケ、そこに積もる落ち葉を踏みしめながらの雨の日の山歩きもいいものだ（写真・左）。誰にも会っていない。静かすぎてさみしくて人恋しい。



源流への下りの道標（写真）のある地点で一二時三分を廻っていた。甲武信ヶ岳山頂まで三〇〇四〇分、往復で一時間、時間的には行けるが、山頂は霧の中だし展望は全く期待できず、体力的にも限界近い、前回二度山頂を踏んでいる……という理屈を一杯並べて、ここから千曲川源流へ下ることにした。



縦走路から源流の道標までは、約二〇分の急な下り、そこから沢沿いの遊歩道を一時間ちよつとでナメ滝にでる。雨は強まったり弱まったりで、雨具を出さず相変わらず迷い続けて下りた。毛木平駐車場の約三〇分前から、道は林道となり楽になった。春には新緑に感激した道だが、雨に煙る林道もまた格別の風情だった。

●道中・山頂で出会った人たち

昨日の廻り目平の写真撮影グループ、大弛峠までの林道での自動車やバイクとのすれ違い以降、大弛小屋では独り

ぼっちの泊まり、主脈縦走路では孤独の歩き・自然の一部になりきった。千曲川源流のナメ滝（写真）上部で、三人の高齢者（一人は七四才、後の二人も私より年上？）のグループと、少し遅れてやはり三人のグループとすれ違った。これから甲武信ヶ岳経由で小屋泊まりとのこと、雨・ガスのなかご苦労様です、とつぶやく。林道になって十文字峠方面から五〜六人の人たちが下山してきた。ガイドツアーの中老年グループのようだった。駐車場に着きガイドの車に乗って帰っていった。そぼ降る雨の駐車に車が数台、人はまた自分だけになった。



●毛木平・駐車場での中泊

今回は、「車中泊」することとした。二日目の午後四時ごろ到着、雨の中、車の中で着替えし、おやつ代わりのカップ麺の用意をしつつ、荷物整理・寝床の用意など行った。例のビール＋ウイスキーを作り「貝の缶詰」を肴に、長駆

の縦走を成し遂げた自分に乾杯した。

今回の挑戦テーマの第一は「自転車での移動…毛木平（自動車置き場…写真・右）から廻り目平まで」、第二は「自動車・車中泊…毛木平で」だった。装備はスリーシーズン用寝袋と予備の毛布、枕兼用の座布団、ラジオ、折りたたみテーブル・チェアなど、ガスボンベやその他の炊事セット。快適だ（写真・左）。

車のバック・ドアの張り出し（テント？）がもう少しあれば、今回の雨でも充分だろう。車中の寝るスペースも私の身長なら充分足りる。換気が心配なのでマド上部を五センチ位開けて寝たことで窓内側にも水滴が付いてい



た。遅い時間の下山など活用できそうだ。

●廻り目平・金峰山荘

翌日、廻り目平・分岐に置いた自転車を車で回収する。自転車で苦勞した毛木平から廻り目平までの道も自動車ならあつという間だ（写真・右…小川山前衛の岩峰群）。

分岐から金峰山荘へは、白樺の美しい道が続いていた。山荘やキャンプ場はゲート入場（いかにも公營的？）で気分を害すが、山荘は高原ロッジ風（写真・左）で見栄えはいい。ここから金峰山、小川山、岩場巡りなどのベースになりそう。いずれ訪れたい。

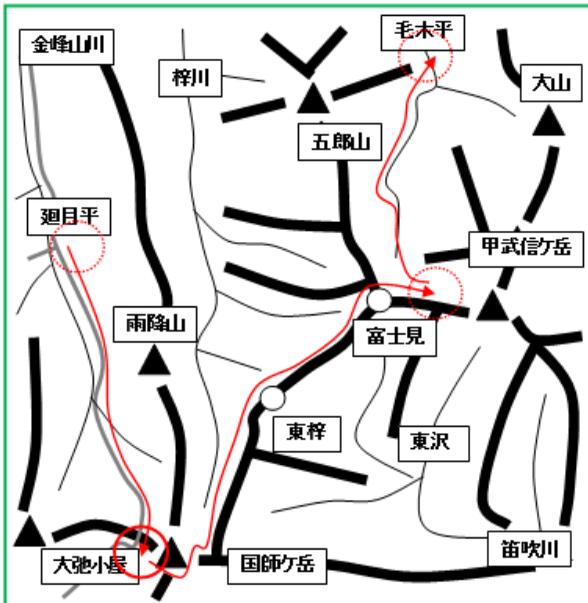


【私の記録】

＜国師ヶ岳から「甲武信ヶ岳」…2006. 10. 13＞



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

一日目…毛木平・駐車場=11.30—(1.20)—廻目平分岐=12.50~13.00—
(1.20)—管理小屋=14.10—(1.00)—展望台=15.10—(2.00)—大弛峠・小屋
=17.10

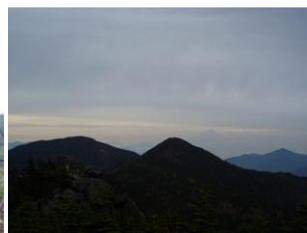
二日目…大弛小屋=5.30—(1.00)—北奥千丈岳=6.30—(0.10)—国師ヶ岳=
6.40—(1.30)—国師のタル=8.20~8.30—(1.00)—東梓=9.30—(1.10)—
両門の頭=10.20~10.30—(0.50)—富士見=11.20—(0.50)—水師=12.10—
(0.20)—源流分岐=12.30—(0.15)—ナメ滝=14.00—(1.50)—毛木平=15.50

四、奥秩父の要・中核の「甲武信ヶ岳」

甲武信ヶ岳は、奥秩父のほぼ中央に位置している。山容が「中央の雄」といえるかどうかは別として、ここも深山久弥の「日本百名山」に「奥秩父のヘソ」として紹介されている。三つの川の分水嶺、三県にまたがる分岐の山として存在感を示している（写真・上：三宝山から甲武信岳）。

甲武信ヶ岳への登頂ルートは、私が今回登った、①「毛木平からの千曲川源流ルート」、別の機会に登った、②秘境の縦走といわれる「国師ヶ岳からの縦走ルート」、さらに③「雁坂峠から破風山を経てのルート」、私は下りに使った④「西沢溪谷から徳ちゃん新道ルート」、同じく⑤「十文字峠からのルート」、まだ歩いていない栃本・河又から十文字峠へのルートなど、昔から色々と歩かれていた。

甲武信ヶ岳への登頂は溪谷・沢筋のルートも多い。千曲川源流からもそうだが、田部・小暮両先輩が楽しんだ、山梨側の「笛吹川・東沢」の遡行や、埼玉側の「入川・真の沢」なども有名だ。甲武信小屋（写真・下）は、山頂から東（木賊山方面）に一五分ほど下ったところであり、数多くのルートの要となっている。小屋は古いが、百人以上の宿泊可能な規模がある。



千曲川源流から「甲武信ヶ岳」(二〇〇六年六月三・四日)

「甲武信ヶ岳」には二回登っている。最初は二〇〇六年六月三日、川上村の毛木平に車を止めて、千曲川源流を溯り「甲武信ヶ岳」に登り、甲武信小屋に泊まった。翌四日は、小屋から甲武信ヶ岳の再び登り、「十文字峠」まで縦走し毛木平に戻った。二度目は雁坂峠から破風山をへて「甲武信ヶ岳」に登り西沢溪谷へ降りた。

●毛木平：朝食・出発準備

川上村の川端下(廻り目平分岐)・梓山(毛木平分岐)を過ぎ、高原野菜の畑の広がる舗装農道を、十文字峠や甲武信ヶ岳に連なる前衛の山々を正面に望みながら、快適に車を走らせた。未舗装道に変わってまもなく、村営の毛木平(場)駐車場に着く。日曜日の朝とあって、駐車場に続々と到着する車、これか



ら登ろうと準備する人たちで、極めて賑々しい。天気は快晴に近い。予報では今日は晴れ、明日はやや曇りとのこと、今日の山頂での展望に期待する。朝食として、高速道の「横川SA」で買ったお握りを二個食べる。

●千曲川源流の道筋・ナメ滝・源流水源地標

団体や他の登山グループと重ならないように、駐車場を八時三〇分に出発する。十文字峠分岐を経て三〇分以上、車の通れる幅の林道(写真・上)が続く。緩やかな登り勾配ではあるが、自分の体調を確かめ、慣らすには丁度いい。

毛木平・駐車場周辺、駐車場から十文字峠への分岐、さらに千曲川源流を辿る(写真)、林道・沢沿いの道：人や車のざわめきさえなければ、とても素晴らしい所・道筋だ。なによりも季節柄・新緑がまばゆい。この辺は主にカラマツ・シラカンバが植生している。この新緑がことのほ



か素晴らしい。カラマツは、他のところで落葉した寒々しい林を見ているだけに、特にそのように感じる。山々を遠望すれば、新緑の浅い緑と常緑樹の濃い緑のコントラストがパッチワークをみるようだ。さらに上に行くときコメツガ・タケカンバ・オオシラビソが植生している。

歩き始めて林道が登山道になり、傾斜も少しくつくなり始めると沢筋が広くなり「ナメ滝（写真）が現れた。ナメ滝はほぼ二段につながる水量もあり見応えがある。一〇時一〇分の到着、ここまで、ほぼ休みなしの約一時間四〇分だった。ガイドの所要時間とほぼ同じペースだった（前半はいつも快調）。



ザックをおろしての一〇分ほどの休憩（行動食…といってもチョコレート二口とスポーツドリンク）をとる。沢あいを風が渡ってきて心地よい。休んでいると、小屋泊まりして甲武信ヶ岳経由で下ってくる人たちが、私を追い越して登っていく人たち、と出会いが多くなってきた。

谷が沢になり、水流が細り、山あいが狭まってくる、いよいよ「源流」の雰囲気が出で来る。しかし、左右から沢が入り込んできて、水量はまだ豊かだ。ナメ滝から一時間二〇分、一一時三〇分に「千曲川信濃川源流水源地标」に到着。この間もガイドの所要時間とほぼピッタリだった。



昼飯にする。といってもお握り一個、予定では後一時間で甲武信ヶ岳・山頂なのでそのとき本格的にする。先ほどまでの天気が怪しくなってきた（上空に雲が出て陽が遮られてきた）。寒さを感じるようになってきたので、一五分ほどで腰を上げる。ここからはキツイ登りを想定し、サポートを両膝につけて靴紐を締め直しをした。

●源流水源地標から縦走路・山頂

源流水源地標から奥秩父主脈縦走路（国師ヶ岳→甲武信ヶ岳）まで、苦しい登りを覚悟していたが、体調が良いの

かさほどでもなかった。予定通り三〇分で稜線に出た（後で調べたら駐車場の標高が一四六〇m、ナメ滝が一七八三m、水源地標が二二〇〇m、稜線が二三〇〇m、山頂が二四七五m）。

あまりにもあっけなく稜線・縦走路に躍り出て拍子抜けした。木の間越しに、山梨・埼玉側の山並みが望めた。天候は曇りで、八ヶ岳・南アルプス・富士山といった遠くの山々は望めなかった。再び樹間のゆるやかな道を行く。直下の登りで森林限界の岩場を登ると、ひよっこり山頂

（写真）に出た。



見え隠れする国師ヶ岳・金峰山、意外とでかい山容の小川山、時折、富士山の一部が見えた。自前の双眼鏡で確認すると、国師の影に北奥千丈岳、キレット状の大弛峠から朝日岳、その奥に山頂が突起している金峰山が見える。みずがき山は金峰山の陰で一部しか見え、逆に、小川山の山容が大きく見えている。山頂から反対側（東・北）は木々

に遮られて展望は良くない。小屋への下りで東側の木賊山・破風山方面が望めた。

社会人グループと学生・山岳部風のグループと山頂はにぎやかだった。関西から来たという同じ年配の独りの方に記念撮影をお願いする。このとき結構ガスが出始めていて、鮮明な写真にならなかった。昼食のおにぎりを一個食べる。残りは明日の昼飯用に残す。学生たちが出発し、社会人たちも、独りの方も下り始めると、山頂には私だけになり、静寂が訪れ、なんとも不思議な空間だ。

山頂であつた人々、関西のお医者さん、新潟のご夫婦。写真を撮ってもらつた年配の方は関西のお医者さんとか。「関東の人はいい山が沢山あつてうらやましい……」といていた。関西から奥秩父の山に登りに来るなんて…。

新潟のご夫婦は、私は独りぼっちで山頂にいと且那さんが先に、遅れて奥さんが登ってきた。会話を聞いていると「なまり」から新潟の人だとすぐ思った。聞いて見ると「見附」だという。私の親父の故郷だ。話が弾んだ。山頂になんやかやで一時間三〇分、ビール飲んでいるご夫婦にお暇して、一四時一五分出発、一四時三〇分に甲武信小屋に着いた。

● 宿泊環境・今回は「甲武信小屋」

小屋らしい山小屋…(写真)。中に入るとさらにそう思う(雲取山荘やみずがき山荘とはえらく違う)。ネットで見ていた小屋主の「徳さん」が受付してくれる。さつそくビールもらう、でも三五〇〇Cが五〇〇円・二缶…高いなあ。

小屋の下にテント場があり、大学生の新人強化合宿とかで何張りかのテントがあった。小屋は、後から分かったのだが、団体客(ツアー)何組かとドッキングしたようだ。一五〇人収容可能のところほぼ満員に近い…小屋の二階に敷きつめられていた布団でわかった。



これが噂の、最盛期の山小屋の「二人一畳以下の超ザコ寝状態」のようだ。いまさら後悔しても始まらない。そして当然ながら「夕飯は大量生産可能なカレーライス」、しかもセルフサービス…。割引の団体客と正規料金の個人客と

寝床も食事も多少の差別化はできないのかなあ…と独りつぶやいた。

● 荒川水源の碑・早朝の小屋前の混雑

小屋裏の上に、荒川水源の碑が埼玉県知事名で立っていた。長野側の千曲川源流の道標にあやかっていたわけでもないだろうに、石造りの立派な碑のわりにこちらはあまり「有名」でない。奥秩父での遭難碑もあった。

朝の小屋は早くから騒々しい。四時過ぎには朝飯作りが始まり、気の早い宿泊者が薄明かりの中うごめきたす。四時半になるともう寝ていられない。こちらも着替えて、ザックの詰め替えもした。五時からの食事にあわせてトイレのため下に下りる。

昨夜は一九時ごろから横になり、二〇時消灯、二一時ごろやっと静かになり、寝つけた。出発日前夜も夜中に度々目が覚め(遠足前の子供みたい…)、とても睡眠十分ではない。この夜も、一日中の行動で疲れているのに、やはり度々目が覚めて寝不足気味だ。五時からの朝飯も…、もういや。超満員なんだから仕方なし。

● 独りきりの甲武信ヶ岳・山頂

朝食後、団体グループがそれぞれ出発準備している。テント場の学生たちも出発しそうに騒ぎ始めた。先駆けて五時三〇分前に出発する。小屋周辺の喧騒が届かなくなるともなく、人気のない甲武信ヶ岳・山頂に到着。遅れて団体客が着そうなので長居は禁物だが、曇天ながら昨日とは違う雲行きや独り展望を楽しむ。



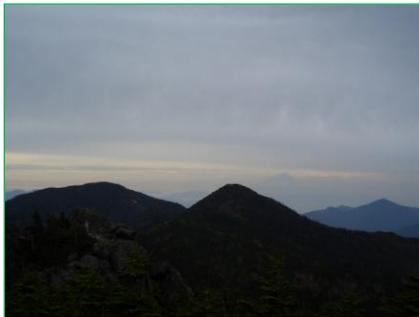
国師ヶ岳から朝日岳、金峰山がかろうじて遠望できる(写真)。ここから国師ヶ岳へ向かう稜線に霧が流れて幻想的だった。東側はやや朝焼け風だが、富士山がうっすらと輪郭を見せていた。今日の天候は予報からこんなもんだらうと諦めた。予報を信じての山行きでもままならないものだ。

登ってくる人の気配がしたので、山頂後にして下り、三宝山とのタルに近づくと、先行する一〇人ほどの団体(商

業ツアーらしい)に追いつく。私より小屋を先発したらしい。ほとんど女性のパーティーだった(リーダーも)。三宝山・山頂の手前に左へ行く小道が分かれる。三宝右という展望台があるらしい。団体はそちらに、私は直進して山頂に。山頂の岩場からも、甲武信ヶ岳や、南西面の山々が展望できた。予定時間通り六時三〇分には山頂へ到着した。

● 三宝山・山頂からの甲武信ヶ岳を見る

甲武信ヶ岳は三県の県境にあり有名な川(笛吹川・荒川・千曲川)の分水嶺であり、奥秩父の中央に位置することで知られているが、金峰山や雲取山などのように独立峰的な山容・風貌ではない。この三宝山や木賊山が同じ程度の標高で接近しすぎているせいかもしれない。とにかくこの道中で「甲武信ヶ岳」を写せたのは此処だけだった(写真)。標高ではこちらのほうが高い。



三宝山から武信白岩岳まで、ガイドでは所要一時間三〇分とある。二四八三mから二二八八mと標高差二〇〇m程度の下りなので、時間がかかるのは距離が長いためだろう。時々開ける東・北側の奥秩父方面の山々(写真・右)、雲海の垣間の深い渓谷・沢をみながら、淡々と歩を進めた。山や森に独り「抱かれている」という感じ。

●武信白岩山・大山

三宝山から尻岩というユニークな岩までの下りは地図の上ではかなりの距離になっているが、時間的には三〇分しかかからない。この尻岩の基部から「武信白岩山」の登りが距離のわりに一時間もかかった。合計ではガイ



ドの所要時間通りの行程だった。武信白岩山は突起した岩峰(写真・上左)といった感じで、脆いので登頂禁止となっていた。後で気付いたのだが、三宝山よりの手前の岩峰が展望もいいうだ。途中で先に行つたご夫婦が休んでいた。

武信白岩山での休憩が結果として出来ず、縦走路

途中の東側展望の開けた場所で、昨日のお握りを食べていると、小屋であった七五歳の先輩に出会う。先に行かれたが、しばらく先で写真撮影しているところでもまた追いつく。その後はなんとなく同行者のように一緒に行動となった。八時四五分に大山(写真)に到着した。

大山は地図には表示され、途中の道標にも表示されているが、山頂には山名表示は何もない。景色もよく、石楠花も群生しているのに。標高は地図の等高線からみて約二〇〇〇m少し欠けるようだ。数は少ないが石楠花が見事に咲いていた。また、八ヶ岳連峰が雲上に見えた。



● 十文字小屋と石楠花（しゃくなげ）

大山からの下りは、結構険しいクサリ付の岩稜が続き、気が抜けなかった。先ほどの先輩との同行でお互いに気遣って下った。ガイドの、武信白岩山から十文字峠までの所要時間一時間一〇分に対し、大山での休憩時間、途中での撮影時間を含めて一時間三〇分で到着、まずまずといったペースだった。

十文字峠近くの石楠花の群生地も開花していなかった。つぼみのないものも多かった。小屋の周辺に石楠花の開花した群生が広がっていた（写真）。小屋の先代（甲武信小屋の徳さんの親父さん）が丹精して育てた石楠花だ。小屋前のベンチで休憩、同行した年配の方、ご夫婦は昼食やコーヒータイムで挨拶して先発する。

峠から稜線伝いに緩やかに下り途中から谷沿いへ向けて



急な下り（八丁坂）に入る。沢沿いの道を行くと「五里観音」を通り千曲川を「挟霧橋」で渡り、林道を駐車場へ。

橋から千曲川源流コースの分岐を通り、毛木平までの（昨日の朝も通った）林道コースは、この時間、この天気（二時近く：天気は快晴になっていた）でも、暑くもなく、新緑の清涼感が満ち溢れていた。それにしても…この音・この声・合唱はなんだ。風や木々の音ではなさそう。

● 駐車場へ到着・昼飯ラーメン作り

駐車場にほぼ予定通り
一一時二〇分に到着、水や
食料、テーブルやバーナー
を出して「ランチタイム」
とする（写真）。慣れずに
手際よくなかったが、おい
しく頂いた。ひと心地つい
て反省、今回の山行きの秀
逸は、評判の石楠花も良か
ったけれどなんといつて
も「カラマツやシラカンバ
の新緑の林」だった。

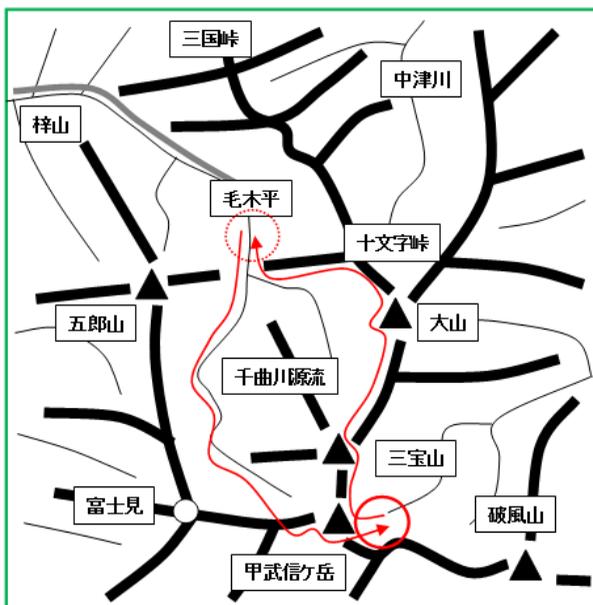


【私の記録】

<毛木平から「甲武信ヶ岳」…2006.06.03>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

一日目…毛木平=8.30—(1.40)—ナメ滝=10.10—(1.20)—水源地標識=11.30
～45 水源地標識—0.30—主脈分岐=12.15—0.30—甲武信ヶ岳(2475m)=
12.45～14.15—0.10—甲武信小屋=14.30

二日目…甲武信小屋=5.25—(0.20)—甲武信ヶ岳=5.45—(0.40)—三宝山
(2483m)=6.30 —(0.30)—尻岩=7.00—(1.00)—武信白岩山(2288m)=
8.00—0.45—大山=8.45—0.45—十字峠=9.30～45—八丁坂・五里観音—
(1.30)—毛木平=11.20

雁坂峠から「甲武信ヶ岳」(二〇〇六年一月三日・四日)

「甲武信ヶ岳」には二回登っている。最初は二〇〇六年六月三日、川上村の毛木平に車を止めて、千曲川源流を溯り「甲武信ヶ岳」に登り、翌日に「十文字峠」まで縦走し毛木平に戻った。二度目は今回(同年の一月三日・四日)、雁坂峠から破風山をへて「甲武信ヶ岳」に登り西沢溪谷へ降りた。

●雁坂小屋の朝食

前日は新地平から「雁峠」に登り「古札山・水晶山」をへて「雁坂峠」に登り、峠下の雁坂小屋(写真)に泊まった。翌朝六時から食事、六時三〇分の出発と予定していたが、五時三〇分には食事のお呼びがかかった。



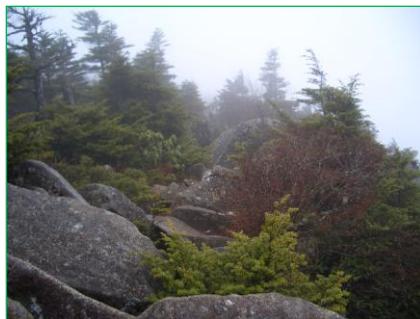
既に用意万端だったので、六時に出発が可能になった。この時間ではランプなしでの歩行が可能な明るさになっていた。天気は望むべくもない、

ものすごく深い霧のなか小屋を後にした。管理人(北田さん)が、鐘を鳴らして送りだしてくれた。

●雁坂嶺から・東破風く西破風、霧深い稜線

峠までは風はなく息を整えながらの登りとなった。霧の激しく流れる雁坂峠に出た。峠から雁坂嶺、さらに東破風山まで、濃い緑の針葉樹と深い霧のなかの登りを迎える。

雁坂嶺、東・西の破風山ともに山頂の展望はなさそうだ。西破風山で出会った人に写真を頼む。



東破風から西破風山まで、さらにその少し先(笹平への急激な降りの手前)まで、岩(花崗岩?)が露出し、累積した所が何ヶ所か出てくる(写真)。小暮・田部先達が、夢の庭園と呼び、ハイマツとの出会いに感動したところだ。

● 笹平から甲武信ヶ岳

西破風山とサイノ河原・木賊山の鞍部は、また雁坂峠に似た笹原が開けていた。避難小屋がある。かなりの下りが続いた後で気分的にホッとす。笹平から、足もとが笹、コメツガの明るい樹林帯の道をさつきの下った分だけ、登り返す。辺りが立ち枯れの稜線からは、木賊山と甲武信ヶ岳が重なり合うように遠望できる(写真)。まだ遠い。



巨岩と砂礫のサイノ河原(二〇時)に飛び出す。振り返ると西破風山の容姿が馬鹿でかく見える。ここを過ぎるとまた深い森の中に入る。残雪がそこかしこに目立ってきた。連休前に降ったようだ。一〇時三〇分にやっと木賊山への稜線と甲武信小屋の分岐に出た。小屋への巻き道から甲武信ヶ岳を目指す。

小屋には寄らずにそのまま山頂への道を行く。甲武信ヶ

岳・山頂には一一時一〇分に到着(実質二度目の登頂)。前回の国師ヶ岳から甲武信ヶ岳の縦走で、山頂手前の峠から千曲川源流の道へ下山してしまっただけで、今回は山頂を踏む。山頂は寒いのでそうそうに立ち去る。

● 甲武信ヶ岳から木賊山・戸渡尾根・西沢溪谷

山頂からは甲武信小屋まで降り、そこから木賊山(写真)への登りにかかる。甲武信ヶ岳からもはつきり見えるガレ場を登る。森林帯に入っれば、木賊山・山頂となる。



エネルギーを補充していると、男女のペアに追い越される。木賊山から破風山への深い樹林のなかの縦走路を行き、戸渡尾根への分岐に出る(一二時二〇分)。ここから三時間の降りが続くのだ。降り始めて、けが人を担ぎ上げてくる若者たちにあっただ。下りが危険…注意…を、改めて肝に銘じる。

一三時四〇分に、丁度降り
半分の「徳ちゃん新道」との
分岐に出る(この少し下が広
瀬湖の展望台：写真・右)。
ちようどこここで、ご夫婦と単
独者とに追いつかれる。ここ
でエネルギーを補充し、降り
で緩んだ靴紐を締めなおし
て、一番後に出発する。

引き続き樹林の急な降り
の後、足もとは笹原になり、
整然と植林されたカラマツ
の黄色に映えるなどらかな
斜面(写真・左)になる。

右手には、鶏冠尾根のギザ
ギザ岩の稜線と、その末端が
切れ落ちているのがみえる。
西沢渓谷の人声や。パトカー
のサイレンが聞こえて里が
近いことを知る。一五時三〇
分に渓谷の歩道に出た。



●帰り…この時期の車の渋滞

登山口(写真)から西沢
経国への導入口の道を、観
光客に交じりながら歩く。
駐車場に着いたのが一六
時、着替えなど帰りの用意
を終えて出発したのが一
六時三十分、雁坂トンネル
から大滝村・秩父湖・三峰
口・秩父を経由して、皆
野・寄居有料道、花園 I
C・関越道で帰った。



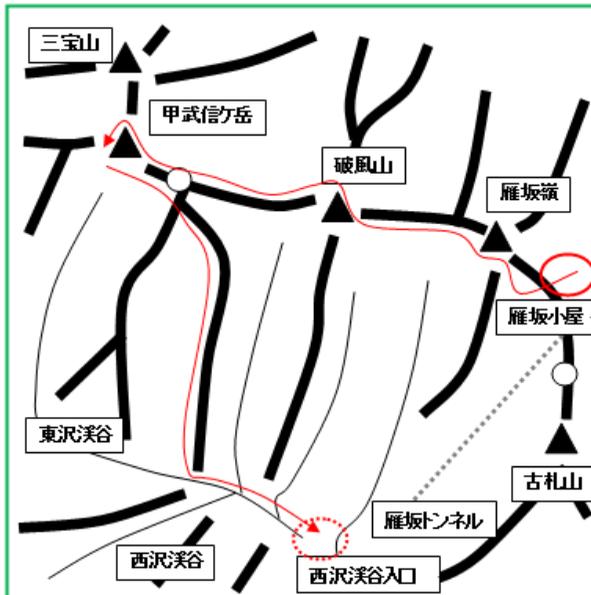
連休・紅葉の時期でもあり、トンネルから秩父市内まで、
車はずまずの走りと渋滞を繰り返した。自宅へは二〇時
過ぎ到着。

【私の記録】

<雁坂峠から「甲武信ヶ岳」…2006. 11. 04>



●「登山ルート」



●「登山タイム」

往路…雁坂小屋=6.00—(1.00)—雁坂峠=7.00—(東破風山經由・1.30)—
西破風山(2317m)=8.30~8.40—(避難小屋經由 1.20)—サイノ頭=10.00—
(0.40)—甲武信小屋=1040—甲武信ヶ岳(2475m)=11.10

復路…甲武信ヶ岳(2475m)=11.10~30—(小屋經由 0.50)—木賊山分岐=12.20
—(1.20)—戸渡尾根分岐=1340~14.00—(徳ちゃん新道 1.30)—登山道入口
=15.30—(0.30)—道の駅隣り・駐車場=16.00

五、奥秩父の代表的な峠「雁坂峠」

奥秩父の「雁坂峠」は、日本三大峠（ここと、南アの三伏峠・北アルの針ノ木峠）のひとつに上げられ、山道・峠道の「国道（秩父往還Ⅱ一四〇号線）」としても有名だ（写真・上…峠、下…東の尾根から見た雁坂峠）。歴史的にも「日本書紀」の景行記によると、日本武尊が東征のため通った道が雁坂峠で、日本最古の峠道であったとされている。

私の「雁坂峠」山行は、甲州側の「雁峠」から主脈を縦走して「雁坂峠・標高二〇八二m」へたどり着き、雁坂小屋に泊まった。翌日、霧深い雁坂峠から破風山・笹平をへて「甲武信ヶ岳」へ縦走し、戸渡尾根を西沢溪谷まで下った。埼玉側からのルートは今だ経験していない。

峠道としての旅ならば、甲州（山梨）からは「広瀬湖」を通り、雁坂トンネル脇の久渡沢を登るルート、武州（埼玉）からは、「秩父湖」・川又を経て、豆焼橋の袂から「黒岩尾根」から雁坂峠へ行くルートと、川又から「岩道場」・「樺避難小屋」をへて雁坂峠へ行くルートがある雁坂トンネルが貫通するまでは、ここもまた奥秩父の秘境だったが、有名な「西沢溪谷」への観光客をはじめ、この周辺の山々の登山者は一挙に増えた…という。



雁峠から「雁坂峠」 (二〇〇六年十一月三日・四日)

「雁坂峠」には一回登っている。二〇〇六年十一月三日、四日、西沢渓谷入り口の臨時駐車場から「新地平」へ出て、雁峠に登り、古札山・水晶山を辿って、雁坂峠に出て雁坂小屋に泊まり、翌四日に、雁坂峠から雁坂嶺・破風山・甲武信ヶ岳に登り西沢渓谷へ降りた。

●臨時駐車場・出発準備

道の駅の駐車場からの強制退去、臨時駐車場での準備など、あわただしさの中で出発予定の八時が近づいた。朝食をとる予定だったが、少し山に入ってからにする。こうしている間もどんどん車が到着：みんな「紅葉の西沢渓谷」目当てなのだろう。どのルートでどの山を登るのか、登山者の姿も多い。駐車場からは破風山の稜線が連なっている。

●雁峠への林道

雁峠への登山口の「新地平」まで、秩父往還・一四〇号線を、西沢渓谷とは反対の「広瀬湖」の方へ進む。さすがにこちらの方へ来る人は誰も居ない。三〇分予定だったが意外と短く一五分で「新地平」の雁峠登山口に着いた。

舗装された林道を登り、車通行止めのゲートをくぐりさらに林道を進む。一四〇号を下に見るようになると、笛吹川対岸(牛首・黒金山の枝尾根：写真)の紅葉がきれいだ。「広川」沿いの林道は、左対岸の唐松林が紅葉して、晴天の空の青さと強いコントラストを見せている。歩む林道は日陰で、体が温まるまでは寒々しい。

林道が右に曲がり、正面から日差しが注ぐ広場で「朝食」とする。静かで心地よい。歩き始めてしばらくすると、鹿が三匹・林道のご真ん中にいた。出会い頭だったので、むこうもこちらも一瞬固まる(熊でなくてよかった)。写真を撮るまもなく三匹それぞれの方向へ散っていった。二時間あまりの林道歩きに飽きて疲れが出てくる頃、道幅が狭まり荒れてきて終点となった。林道の終わりからは、沢と絡んだ道が続き、やがて尾根沿いのブナの疎林帯の登山道になる。



●道中・山頂で出会った人たち

林道を一時間あまり行くと、下山中の高校生たちと出会う。この時間での下山とすると何処での泊まりだったのだろう。林道から沢沿いの山道に入ったところで、自転車（マウンテン・バイク）を担いだおじさん（四〇歳代？）に追い越される。将監峠から笠取山・雁峠周辺はかれらの御好みのコースらしい。

●雁峠・素晴らしい展望

笹が多くなりはじめ、空が広がってくると「峠」が近い。峠に着くと、右手に「笠取山」の三角の山容が見えた（写真）。前回の雁峠は霧で見えなかった。笠取山の裏側には、前回やは見えなかった、和名倉山周辺の稜線が続いている。大きくて広がりのある山域を作っている。



甲州方面は、牛首・黒金山・乾徳山など国師ヶ岳からの稜線続きの山や、奥秩父前衛の山が望める。前回の訪れは、笠取山からの下りでの（雁峠小屋のほうから）立ち寄り、深い霧の中だった。晴れていればなんとも開放的な峠だ。これから向かう雁坂峠とは、どう違うか楽しみだ。

雁峠で、すれ違いの登山者が二人、私の峠手前の登りで見えた一人は、笠取山の方から雁坂峠の方へ先に向かっていた。もう一人は、私が雁峠から燕山への急な登りの中に、遅れて峠に到着した。それぞれコースが違うのだろう。どの人たちとも出会いはなかった。

●燕山・古礼山・水晶山

峠から燕山への最初の登りはかなりキツイ。でも峠を上から見下ろす感じになり、新地平の方向や笠取山への方向が開けていてとても穏やかな開放的な峠だ。この登りの上部からは、笠取山の裏側（北側）に和名倉山への稜線が大きく見える。唐松尾山・西御殿岩から峰続きになっている。

こちらも前回は、霧・雨のなかで全く見えなかった。「燕山」までは樹林帯を行き、燕山・山頂も展望なしで山頂標識もなかった。でも誰も通らず静かで落ち着いた歩きがで

きた。古礼山への稜線は、樹間と甲州側に広がる笹原の稜線と繰り返しに現れる。古礼山の手前には、大菩薩峠・富士山方面が広く開けたベンチのある笹原にでた。ここで休憩・昼食とした。水晶山への稜線は、立ち枯れの多い樹間の笹原の道を行くと、今度は苔むした道に変わる。苔の緑と枯葉の赤茶色とがきれいだ。雰囲気が変わる。この辺りの樹林は多分ブナだろう。

● 雁坂峠

水晶山から二〇分ほどで、雁坂小屋への分岐に出る。時間的に早いので、このまま、峠を目指す笹原の稜線（甲州側は、なだらかな笹原、武州側は、深い針葉樹林が続く）を行く。笹が道を覆い足もとが危うい。先に道標が見えてひと登りすると、雁坂峠（写真）に着いた。これが日本三天山か。しかも国道格の登山道だ。甲州側に、大菩薩と富士山が、霞みがかってみえた。年配の男女二人が先着して



いた。その後、高校生たちのグループが、杓切沢橋からのルートに登ってきた。早々に小屋へ下る。

● 「雁坂小屋」

雁坂小屋も、甲武信小屋や大弛小屋と同様、結構古い。ストロブと語らいのスペースのある宿泊棟と、炊事場と食堂のある棟、倉庫か廃屋（？）がもう一棟あった（写真）。うわさの、国道（一四〇号）が真ん中を通るというトイレも見た。

さつそく寝場所に案内される。珍しい：通路の左右に三段のベット風の作り（前後に二人寝れる）だ。この仕様の部屋が三部屋、その他の部屋にもあるようだ。二段目が私の場所、登るのが垂直のはしごだ。ビール＋ウイスキーを作り、飲みながら着替えや荷物の整理をする。今日の泊まりは二〇数人だそう。シカの肉の味噌汁がご馳走。ご飯はボンカレー（暖めた袋ごと手渡された）。

※翌日は甲武信ヶ岳経由で西沢溪谷へ下山した。

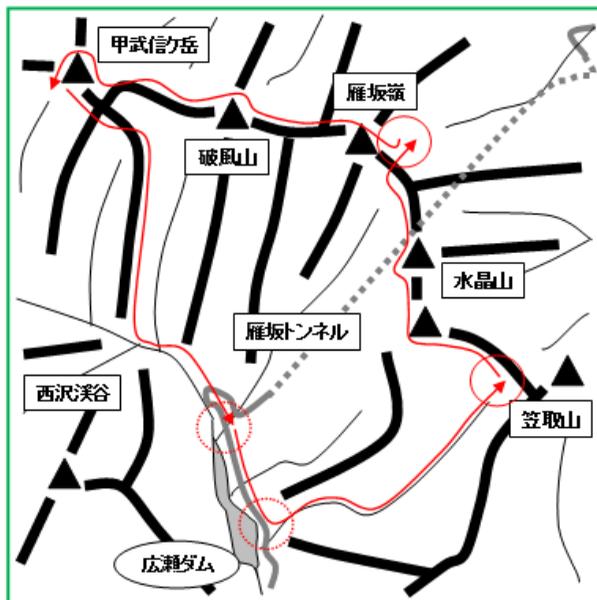


【私の記録】

<雁峠から「雁坂峠」…2006. 11. 03>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

一日目…道の駅・みとみ＝8.00—(0.15)—新地平・亀田林道入口＝8.15— (0.45)
—朝食場所＝9.00～9.15—(1.00)—林道終点＝10.15—(0.45)—雁峠＝11.00
～11.20—(0.30)—燕山＝12.00—(1.00)—古札山＝13.00～13.20—(0.40)—
水晶山＝14.00—(0.40)—雁坂峠＝14.40～14.50—(0.10)—雁坂小屋＝15.00(泊)

二日目… 雁坂小屋—雁坂嶺—東破風山—西破風山—避難小屋—サイン頭—
甲武信小屋—甲武信ヶ岳—小屋經由木賊山分岐—戸渡尾根分岐徳ちゃん新道
—登山道入口—道の駅隣り・駐車場

六、奥秩父・都水源「笠取山・唐松尾山・飛竜山」

●雲取山以西は静かな山旅

東の中核的な「雲取山」から西の山城（飛竜山・将監峠・唐松尾山から笠取山・雁峠から雁坂峠まで）はアクセスの悪さも手伝い、訪れる人が急減する。唐松尾山・笠取山は、青梅街道を「おいらん淵」まで行き、一ノ瀬高原への林道に入る。雁峠から雁坂峠は、秩父往還を行き、雁坂トンネルを抜ける。私は一ノ瀬高原から将監峠に出て、そこから飛竜山・禿岩を往復、将監小屋に泊まり、唐松尾山・笠取山・雁峠と歩き、作場平に下りた。

●東地域の唯一の秘境「和名倉山」

西の「小川山」と並んで、東の「和名倉山」も訪れる人が少ない。こちらは特に「秘境」扱いされている。多くの場合、将監小屋・山の神土から、西仙波・東仙波を経て「和名倉山」に登る（○写真・下：東仙波から和名倉山）。私が○九年に登ったのもこのコースだった。秩父・三峰神社からの和名倉山の山容（写真・上）は立派だが秩父湖側からの尾根コースは、踏み跡が不鮮明だったり、猛烈な藪漕ぎを強いられるらしい。



将監峠から「唐松尾山」(二〇〇六年・八月二四・一五日)

● 駐車場：朝食・出発準備

八月一四・一五日にこの山城に入った。青梅街道の柳沢峠を目指して走り、途中の「おいらん淵」から一ノ瀬高原への林道に入る。谷沿いの舗装はされている。狭い林道を過ぎて、民宿のある集落を過ぎ、「中島川橋」・水干登山口先の駐車場(写真)に七時丁度に到着した。お盆の最中だが「渋滞」はなかった。この一ノ瀬高原では民宿に駐車申し込みしていた一組と、準備中にこの先の「作場平」に行く車が数台通過した。

予定コースの「将監峠」には、下の民宿近くへ林道に戻る必要があったが、舗装された林道に戻るのもいやなので、水干(みずひ)入口からの、水源地遊歩道でも将監峠へのコースに出られそうなので、こちらから行く(これが間違い)。七時三〇分出発。



● 都の水源地標

登山口の案内板をよく記憶して登り始める。今日は将監峠から飛竜山の禿岩の往復(約五時間)があり、決して楽なコースではない。東京都の水源地管理地なので、山林・歩道ともに整備されて、歩きやすいコースとなっている。カラマツとヒノキの人口植林地帯になっている。ヒノキは常緑だが、カラマツは針葉樹なのに落葉する。秋はさしずめ黄色と緑の美しいコントラストの林なのだろう。

この樹林帯を行くと、左の水干方面の登りと右の巡視路(巻き道)に分岐する。巡視路を行くと幾つかの沢を横断、笹の草原状の十字路(写真)に出る。ここで直登するという判断ミスをしてしまった。登山口には確かに「将監峠」方面に通じると記されていたが、下の民宿近くからの峠への登山道へぶつかる



には、さらに巻いていく道(来た道をそのまますすぐ進

む)が正解だったのだ。直登する道を選択したため、唐松尾山・笠取山の縦走路の下に位置する(水干から山ノ神土に通じる)巡視路に直接出ることになった。時間的にもうついでいいはずの将監峠か「午王院(ごおういん)」(写真)に着かないので、持参の地図を正確に読んでわかった。当然ながら分岐点(先ほどの十字路)で確認すべきだった。

●開放感のある将監峠

二時間半で着くはずの将監峠に、三時間半かかって到着。でも山ノ神土、午王院、将監峠のコースはとても快適だった。この時間帯ではまだ青空や薄日が指して撮影をキレイにしてくれていた。峠の先は、位置的に「和名倉山に連なる稜線」のようだ。「山ノ神土」に道標があった。和名倉山の先は、道は荒れて不明らしいが秩父湖方面に通じる。将監峠の由来はこの地形から来ているのかもしれない。



峠には年配のご夫婦が二組ハイキングに来ていた。地元の方らしく、将監小屋の小屋主と知り合っただと行っていた。小屋はこの峠の草原(防火帯のようだ：写真)の下にあるという。皆さんが食事タイムになったので、こちらも時間的に早いが昼飯にする。峠からキツイ登りが続くことを想定し、サポーターを両膝につけて靴紐の締め直しをした。実際の登りはさほどでもなかったが飛竜山・禿岩までの往復五時間の長い道のりとなった。でもこれを行かないと、奥秩父プロジェクトの縦走路に断点ができてしまう。

●将監峠から奥秩父主脈縦走路を東(飛竜方面)へ

将監峠からの登りでは、鹿よけのフェンスがいたるところにめぐらされていた。植林された若木・幼木を保護している。峠を出てすぐに、雲取山・飛竜山から縦走してきた人と出会う。この縦走路は稜線でなく巻き道が多いので張



り合いが無い、展望が無い…、面白みに欠けますね…と云っていた。確かに「水源林の管理や林業で使う道」をそのまま登山道にしている感じだ。でも将監峠にできれば多少開放的になり良いかも…と伝える。今日は笠取山（小屋）まで行くという。

巻き道なのでアップダウンは少ないが距離がやたらに長い。最後の詰めが、飛竜山手前の「大弛み（写真：峠から飛竜山）」から禿岩までの登り。時間的には既に一時間半近くたっているので三〇分強で登れるはずが、倍の一時間以上掛かる。

● 飛竜権現近くのハゲ岩

前回の展望より、今日はさらに悪い（天候は下り坂。明日の予定の唐松尾山・笠取山周辺が僅かに見通せる。今日最後のエネルギー補給をして早々に戻る。計画の行程時間がまるまる一時間以上間違えており、かつ予定より実働時



間もかかっており、将監小屋への戻りが五時近くになりそうになってきた。休みなしでひたすら歩く。

● 「将監小屋」・素泊

将監小屋は青いトタン張り(?)の山小屋(写真)。縦走路から小屋への降り道で、チエンソーのような音がしていたが、小屋主が部屋・風呂場(?)を増築していた。軽トラックがあるので林道は車が通れるらしい。荷を降ろして身体を拭いていると、営林署(当然、東京都だろうな)の人たちが仕事を終えて下山してきた。風貌でわかる…登山靴でなく、地下足袋だった。車で帰っていった。

小屋主も薄暗くなって大工仕事ができなくなる頃(六時半頃)、こちらへ来て、用事ができたので今日は下山する、宜しくね…と云って車で帰ってしまった。そうか今日はお盆だった。仕事でも、独りだけの客に付き合えないわけだ。電話で予約時に言っていた、夏場は、食事をつけないので、



自分で用意してきてね、といわれた。素泊まり四五〇〇円。奥秩父山小屋スタンプリーも四件・四地域の条件を満たし、A賞の「バッチ」がもらえるはずなのに、用意されていないという。

あまり泊まる人が少ないのか、陰気臭いしカビ臭い、寝具が湿っぽい…。トイレは汚い、臭い…出るものも引つ込んでしまう。季節外れの無人の山小屋とさほど変わらない。でも和名倉山へのベースはこころしくない。テントの人たちが多いのかな。

予約した前日、あわててラーメンや缶詰を買い、ガスや食器を用意し、青梅のコンビニで握り飯を多めに買った。ガスでお湯を沸かしラーメンライス（おにぎりを解体して）を作る。その間に既に行ったビールのウイスキー（ホケットビン半分）割を飲む。缶詰の焼き鳥をつまみにする。静かな夕食（写真）。



寝入りばなは、静か過ぎて寝付かれなかったが、夜中、野生の動物が歩き回るような物音が何回かした。トイレに起き、ヘッドランプで照らし、物音を立ててから、外に出た（出口近くで「小」をした）。

●小屋：朝食・出発準備

朝は明るくなり始めた五時に起き出し、昨日と同じ餅入りインスタント・うどん、プラスおにぎり入りを作る。ついでインスタントコーヒー（砂糖なし）も作る。作って、食って、すすって、三〇分もかからず終わり。早々に出発する。天気は予報どおり、降ってはいないが霧が深く、良くなさそう。笹道が多いので、ズボンのみ雨具をはく。将監峠も、午王院・山ノ神土も霧の中。幻想的ではあるが、何か出てきそうで気味が悪い。

●西御殿岩・展望は霧の中

昨日の飛竜山の往復の縦走路と同じく、稜線下の巻き道が続く。笹道の足もとに「西御殿山」の分岐の道標が見つかった。一五分の所要タイムなので気安く立ち寄ったが、とんでもなかった。霧雨の中深い笹で下半身ぐっしょり。下だけ雨具をはいていて正解だった。道は崩れていたり、

ガレていたり、ツメは岩場の登りで、約三〇分近くかかった。予想はしていたが、三六〇度の展望は霧ばかり（写真）。晴れていけば北面の「和名倉山」、昨日辿った東の「飛竜山」、西のこれから行く「唐松尾山」、そして、足もとに一ノ瀬高原が開け、その先に大菩薩連峰が見えるはずだ。昨日の禿岩と同様、「またおいで：」。一応来たというア

リバイ写真をとり、同じ時間をかけて縦走路にもどった。この往復で雨具の防水にもかかわらずグツシヨリに。

●唐松尾山・狭く地味な山頂

縦走路に戻り三〇分程で「唐松尾山」に到着（雲取山より標高がやや高い）。ここから北へ降りる尾根があり、マニアックな人たちの藪こぎルートがあるらしい（通行止めになってた）。山頂は樹林帯の中で展望きかず。エネルギー補給をして早々に出発する。稜線上を少し下ると岩場があり、そこからは展望がききそうだった。山頂からはしばらく



く稜線歩きが続いた。晴れていけば樹林越しに周囲が見れるはずだ。

唐松尾山からの稜線歩きが一時間ほど続き、「黒えんじゅ」近くになると巻き道に戻る（写真）。このまま行くと「水干」とさらに先の「雁峠への分岐」「笠取小屋」へ続く。笠取山への直登コースの道標が見えてきた。巻き道から急な登り道に変わる。

●笠取山への分岐・山頂

人声・ラジオの音がする……。まもなくご夫婦が追いついてきた。幾つかのダマシ・ピークのあと、笠取山・山頂に到着。ここで追いついたご夫婦に挨拶。地元山梨県の人で柳沢峠を越えて作場平に車を止めて登ってきたという。山梨一〇〇名山が目標とか。登ってきた道に戻り、「水干」經由で作場平・駐車場へ下山すること。写真を撮りあう（写真・次頁・右）。ご夫婦は早々に戻っていった。



ここで昼飯とする。霧雨というより、雨が降ってきた。展望も全く無いので早々に出発する。山頂より西側に行くと開けた稜線上の広場があり、晴れていれば展望もありそう、狭い山頂より休むにはこちらが適している。

●雁峠への分岐・雁峠往復

笠取山の西の防火帯(こども黄色い花の群生だけ)を降り、鞍部の分水嶺の案内板に着く。一面の笹原で晴れていれば開放感のあるいいところだろう。降りきると分水嶺の案内板のある小高い部分があり、下ると「雁峠」への分岐にでる。往復で二〇分程なので、寄ることにする(縦走路のつなぎの意味も含め)。写真・左。



笠取山の西の鞍部の草原と、雁峠小屋・雁峠の草原とは、ひと森隔てている。雁峠からは登りが「雁坂峠」方面への縦走路、左への下りは、広瀬湖近くの「新地平」へ行く。「雁峠」は、昨日の「将監峠」とは少し趣の違う風景だった。また分岐に戻る。

●笠取小屋から水源遊歩道を作場平まで

雁峠分岐から笠取小屋(写真)までは、小型車の通れるような林道が続き、小屋からはさらに整備された林道が続いた(柳沢峠まで続くという)。この林道をヤブ沢(分岐)まで行き、林道を離れて一休坂分岐を経由して作場平口(駐車場)への遊歩道を下る。



道は整備され快適に歩ける(ただし、一日中歩いた足には堪えた)。ところどころに森林管理の説明板などあり勉強にもなった。遊歩道が横切る沢筋が小川になり、水量が目に見えて増えてくると、

一ノ瀬からの舗装された林道に飛び出す。

● 駐車場へ到着

作場平（写真）から林道を二〇分・一四時丁度に、車を置いた駐車場に到着、着替えて帰りの用意をする。何十年ぶりかで駐車場脇の原っぱで「キジ打ち」をした。迷惑のかからないように処理。

総歩数四万三八〇九歩／
一日目・約二万五〇〇歩／二
日目・二万三三〇九歩。足回
りが雨具と二重ズボンだっ
たせいかな疲れた。



丹波の「のめこいの湯」に寄るも、お盆のせいか混雑していた。地元野菜もほとんど無かった。奥多摩駅近くの「山城屋」で毎度のわさび漬けを買う。途中の青梅街道では、御岳渓谷でのボートセーリングやカヌーの遊び人たちが民宿や駐車場に帰るのに出会った。

● 追記：唯一群生していた黄色の花は「マルハタケブキ」
帰宅して調べたら、偶然にも「雲取山荘」のHPに写真
掲載されており分かった。以下は検索した結果。

■（北関東地区自然保護事務所の「シカ日記」より）

この時期、（奥日光）の森の中を歩くと林床植生が非常に乏しい場所があることに気づきます。ミズナラ・スズタケ植生である（千手ヶ原）も、今では、かつて林床を覆っていたスズタケの姿を見ることはほとんどなく、代わりにマルハダケブキ、シロヨメナ、イケマ、オオハンゴンソウ、キオンなどの植物が広がっています。これらはシカの食べない植物（不嗜好性植物）です。

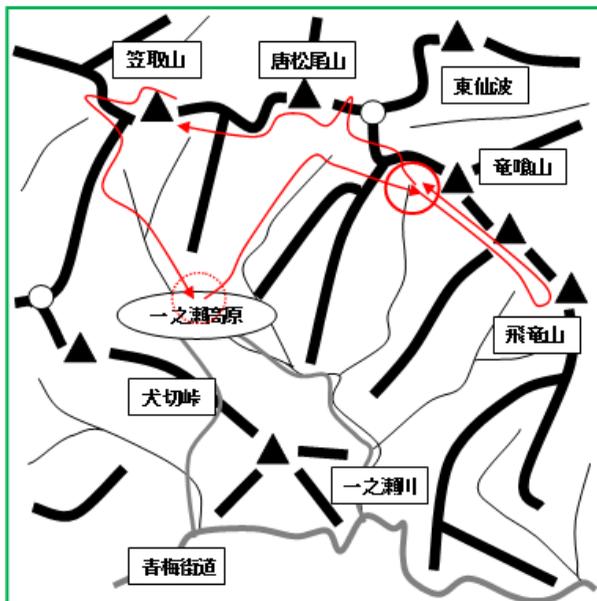
シカの急激な個体数増加により、主食であるササがその食圧に耐えられず全て枯れ、今ではシカの食べない植物のみが繁茂するようになったと言われています。ササが一斉に枯死した理由は諸説考えられますが、現在の植生を見ると、シカによる影響の大きさが容易に想像できます。

【私の記録】

＜将監峠から「唐松尾山」…2006. 08. 14-15＞



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

一日目…駐車場=7.30—(牛王院下經由 3.30)—将監峠=11.00~11.20—(2.40)
—飛竜権現(ハゲ岩)=14.00~14.20—(2.20)—将監小屋=16.40

二日目…将監小屋=5.45—(0.30)—山ノ神土=6.20—(0.40)—西御殿岩分岐
=7.00—(0.30)—西御殿岩=7.30—(0.30+0.30)—唐松尾山=8.30—(1.30)—
笠取山分岐=10.30—(0.30)—笠取山=11.00~11.10—(0.50)—雁峠=12.00—
(0.30)—笠取小屋=12.30—(0.30)—やぶ沢=13.00—(0.40)—作場平=13.40—
(0.20)—駐車場=14.00

午王院平から「和名倉山」

(二〇〇九年四月二八日)

●三ノ瀬から山の神土の分岐まで

四月二八日、青梅街道(国道四一一号)を山梨県の丹波のさらに奥の「おいらん淵」まで進み、その先の「一ノ瀬林道」を目指した。が、林道は土砂崩れで通行止め、さらに先の「落合」から犬切峠を越えて一ノ瀬・三ノ瀬へ入るように看板掲示されていた。一瞬、雲取山か大菩薩峠へと、予定変更を考えるもそれも問題と、計画通り三ノ瀬の「みはらし茶屋(桜が咲いていた)」の駐車場(写真)へ着いた。早出(三時半起床・四時前出発・青梅まで高速利用)したので、トラブルあるも六時三〇分に着くことが出来た。

早起きの店のおばさんに駐車料金(五〇〇円)を払い出発する。直ぐ下に将監峠への林道の始点がありここに入る。標高は二三〇〇m前後で結構寒い。三〇分ほどで七つ石尾根との分岐に出る。今



回は、直接尾根沿いを登り「午王院平・山ノ神土」に出る予定だ。

笹が幅広く切り開かれて、落葉した唐松の明るい尾根道(写真)を左右の山々・尾根筋を見ながら快適に登る。将監峠からの道を合わせて尾根が穏やかに広がりを見せはじめる

と「午王院平」に出て、高低差の少ない道を行くと、和名倉山への分岐の「山ノ神土」についた。

●山の神土から和名倉山まで

ここからは未踏の領域だ。唐松尾山(西御殿岩)に通じる尾根筋を右手に回りこむように進む。笹を切り払った斜面の道で滑りやすく歩きづらい。行く手に端正な三角錐のピーク(リンノ峰)が見え、遠くに「雲取山」や三条ダルミからの「三ツ山」が見える。



リンノ峰の手前から左手の巻き道を進み、西仙波に向かう、幅広くなった尾根筋を進む。西仙波付近は道標が無く、岩場が続き、何処がどこかわからない。木々の途切れるところから、雁坂峠へ向かう尾根筋、雁坂嶺や木賊山、小さく甲武信ヶ岳、三宝山と見える（写真）。東仙波は南側を中心に一八〇度以上の展望が開け、奥秩父の東地域の山々が、反対側（北）から望める。



東仙波からは、笹原のピークの「焼小屋の頭」を通り「吹き上げの頭」は左手の巻道を行う。単調さに飽きてくると幅広い「八百平」に出て、川又への分岐、二瀬分岐、と案内される。その先の千代蔵休ン場を横切り濃い樹木の間を行くと和名倉山・山頂に出る。

●和名倉山から三ノ瀬へ戻る

道標があつて始めて山頂とわかる、なんとも寂しい佇ま

いで、展望も全くない平坦な場所だった。写真好きの重装備の単独者がいた。記念撮影して早々に引き上げる。

先ほどの開けた千代蔵休ン場（写真）で昼食にする（一時四〇分〜一二時）。戻りは速い。しかし、足腰に疲労を感じる。シラカンバやダケカンバの疎林が気分を慰める。北側では所々凍結や残雪を見た。東仙波の展望を楽しみ、西仙波付近の石楠花の咲く頃もいだろうな…と思いつつ山ノ神土に着いた。



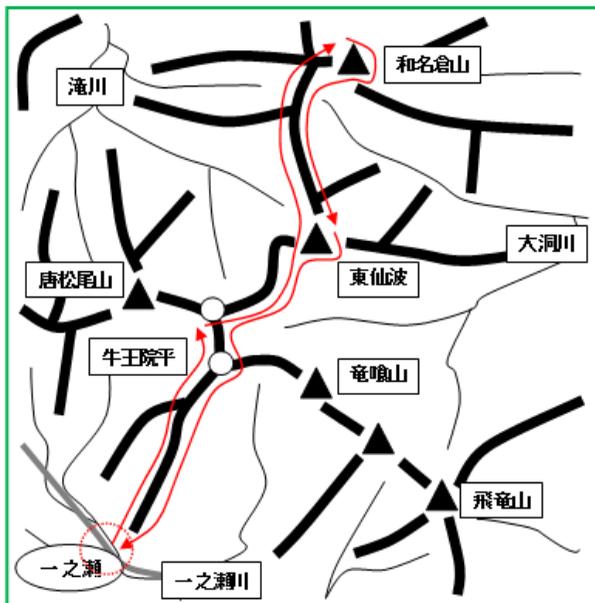
ここまで、行きは休憩含み三時間・帰り二時間半だ。ガイドとは随分違う。ここからは一時間少し。明るく唐松の落ち葉でクッションの効いた尾根を早足で下る。茶屋でお茶をご馳走になり、健脚だ…といわれ照れる。ここから車で長かった。青梅街道の奥多摩道は快適な進みだったが「新青梅」から渋滞が続いた。

【私の記録】

<一之瀬から「和名倉山」…2009. 04. 28>



●「登山ルート」



●「登山タイム」

往路…三ノ瀬=6.40—(1.50)—山ノ神土=8.20—(1.20)—東仙波(2003m)=
9.40~9.50—(1.00)—二瀬分岐=10.50—(0.30)—和名倉山(2036m)=11.20

復路…千代蔵休ノ場=12.00—(1.20)—東仙波=13.20—(1.10)—山ノ神土=
14.30—(1.10)—三ノ瀬=15.40~16.00

丹波から「飛竜山」(二〇〇六年・七月二一・二三)

●丹波・出発準備

七月二一・二三日に飛竜山を目指した。のめこいの湯・駐車場準備、新調した登山靴・ザックの装着に気を使う。六時四〇分にスタート。実は、時間を急ぎ朝食抜きでスタートしたこの行動が、後で苦しむ要因の一つとなった。天気が曇り空だが雨の気配は無い。

広い駐車場を横切り、青梅街道へのキツイ登り坂を行く。街道に出て一〇〜一五分で村役場・小菅方面の分岐を経て「丹波(たば)バス停」に着く。村人に確認すると、先の右がサオ(ヲ)ウラ峠への登山口(写真・下)と教わる。

●だんだん畑を行く

青梅街道から登山道に入ると、山沿いの緩い傾斜地に野菜畑が作られている。道は舗装された農道となっている。農道が途切れた先に、金網フェンスがあり、鍵のついた出入り口があった。「利用者は開け閉めをキチンと…」とあり、作物への鹿などの被害が多いことが想像できた。森林地帯と畑との境には「鹿(猪・猿も?)よけネット」が設置さ

れており、登山道はそれに沿っていた。

後で、三条の湯の小屋番の方に聞いた話では、奥多摩・奥秩父での「鹿」の被害は、山里の人間の作物だけでなく、木の芽・木の皮、草花(高山植物も含め)を食べつくすそうで、被害甚大とのことだ。

東京都や埼玉県では適正個体数まで狩猟許可が出ているそうだが、山梨県側に逃亡してイタチゴッコらしい。確かに、山中で見ると可愛らしいが、一面では(個体数のバランスが崩れれば)自然の破壊者(他の生物に対する)でもあり、自然保護・鳥獣保護の難しい問題となる。

●サオウラ(竿裏)峠への八〇〇mの登りの連続

丹波バス停が標高推定六二〇〜五〇m、サオウラ峠が一四一四mなので約八〇〇mの標高差を一気に上ることになる。ガイドでは一時間四〇分、三条の湯のHPでは約二時



間とある。登りはじめてで今七時だから九時過ぎごろには「峠」に着く、と読んでいた。

里の気配が消えて、森林帯（杉が多いようだ）の登山道を行く。左右の巻き道風の緩いのぼりと、ジクザクのキツイ登りが繰り返される。「山王沢」の道標までの約一時間は順調なのぼりだったが、さらに立ち止まり・汗拭き休憩

を加えての一時間近く（合計二時間）の登り続けても、「峠」近くの気配（地形的に）がまったく現れない。空腹を感じ、いなりを三つ（小さい）を食べ休む。それからさらに一時間近く登り続けてやっと一〇時二〇分ころ「サオウラ峠」に出た（写真）。休みを入れて三時間四〇分かったことになる。なにかおかしい…。

●峠からミサカ尾根経由の飛竜山を断念

「峠」までの異常な時間の掛かりようもさることながら、疲労感がいつもより強く感じている。これから先のミサカ



尾根（熊倉山・前飛竜・飛竜権現）からの飛竜山・山頂への登りは、ガイドで三時間半、そこから三条の湯への降りも二時間半以上かかる。ガイド通りに歩けたとしても夕方五時過ぎになるし、ここまでの自分のペースでは日が暮れてしまう可能性がある。

調子の悪い原因は、昨夜の猛暑で普段より寝不足、朝食（エネルギー補充）の遅れ、林間の登山道での体感気温が異常に高かった（発汗量から想像して）、新しいザックの重さ（約一〇キロ）などが考えられる。

●峠から三条の湯へ

せめて熊倉山までとサオウラ峠から三〇分超足を延ばしたが、登りでの苦しさは持続可能ではない。続行は断念し、一時三〇分はその地点（推定標高〓一五〇〇m地点…写真）で、昼食のにぎりを二個食べる。



サオウラ峠に戻り、「三条の湯」への巻き道をたどる。峠が一四五〇m(推定)で三条の湯が一〇〇〇mなので、尾根道を巻くように三〇〇m下ることになる。林間なので景色は望めないが、道も整備され緩やかな降りなので、疲れた身には助かる。

ガイドではこのコース一時間四〇分とあるが、登りでもないので、やはり体調のせいなのか、基本的に足が遅いのか、軽い休みを入れて二時間一〇分掛かって小屋(写真・小屋の赤い屋根が見える)に到着した。



●「三条小屋・三条の湯」

二時少し過ぎの受付。若い小屋番の方が独りきりだった。さつそく「三条の湯のお風呂」に入る。湯船は一坪ぐらい。硫黄の匂いにして源泉であることが分かる(湧出温度は低く沸かし湯とのこと)。湯船から窓越しに谷側の深い緑の森が見える。疲れた体には最高のもてなしになる。

昔の思い出：二〇代前後の頃、この「三条の湯」

の記憶が残っている。確かに木の風呂で窓越しの紅葉が美しかったのを記憶している(ここから雲取山・石尾根を縦走した可能性が高い；同行したはずの当時の山の仲間のO・Sたちの記憶も薄い)。



たった一人の宿泊：風呂上りにビールを頼む。三五〇CCが二缶(一〇〇〇円)；

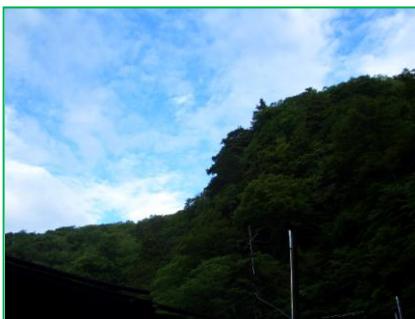
矢張り高いと思いつつ、渴きを潤す。夕方六時から食事、食堂に行くと、なんと宿泊客は「私」独り。前回の甲武信小屋の超満員との落差。小屋番の方と話しながら楽しく食事した(写真・本館の受付と食堂棟)。

●三条小屋の朝食・出発準備

小屋の別棟部屋は「雲取」で八畳間に私だけ。昨夕は食事の終わったまだ薄明るさの残る七時以降に布団を引いて寝転ぶ。思わしくない体調が、入浴とマッサージ、好き

なビール、十分な睡眠で回復するように祈る。沢の音を聞きながら寝入った。

谷深く森に囲まれた小屋だが、朝四時半過ぎには明るくなる。五時におき、五時半の食事まで、柔軟体操をする。朝食はさずがに遠慮しておいた。飯は昨日のこともあり二杯食べた。小屋番さんと「東アルプス楽集国」スタンブラリーの話をした。来年三月までの期間が延期されるらしい。私は「B賞」狙いで行く(奥秩父プロジェクト)。



●三条の湯くカンパ谷く北天のタル

六時に出発。小屋前から青空が見え、今日はいい天気となる予感(写真)。ただし暑いのは困るが。小屋から「カンパ谷出合い」へは枝尾根を巻くように緩やかなのぼりが続いた(写真・下)。昨日のこともあり体調を確かめつつ、ゆ

つくりと歩を進めた。大丈夫のようだ。

山登りの体力とは何を指すのか…まだ自分では分かっていない。登りの負荷を感じる

のは、まず、心臓(心拍数が高くなる)に来る。ある程度の心拍数の範囲に維持できるよう、ゆつくりとした歩き(歩数・歩幅・高さ取り)で調整できそうだ。毎日の生活で心臓を鍛えるには、心拍数上がる速歩き、ジョギングが必要だ。

次が、脚(ふくらはぎ・膝廻り・足裏)の疲労がたまる。

これは歩数に累積してくる。また、登りの疲労と、降りでの疲労とは違うようだ。今回は新しいザックのテストもあり、今まで背負ったことのない一〇キロの加重が影響したことは間違いないさそうだ。毎日の生活で、脚を鍛えるには、速歩き・ジョギングとともに、脚の筋肉の強化のためスクワットが必要なようだ。それと持続性だ。この年では二週間以上鍛えの間隔が開くと、残念ながら元のもくあみだ。



●道中で出会ったご夫婦

カンパ谷への登山道のぬかるみ部分に「鹿の足跡」が数多く見られた。昨夜の小屋番さんの話では、小屋のすぐ側まで出てくるそうだ。雲取山周辺、石尾根の稜線（防火帯）のお花畑も、鹿に食いつぶされて絶滅寸前（花を食うのではなく新芽のときにそっくり食ってしまうので次の芽が出ない）だとか。鳥獣保護から、駆除が必要になった。

昨日とは違い、まずまずのペースで「カンパ谷」を過ぎ、主脈縦走路の「北天のタル」に出た。北天のタルから「飛竜権現」へは飛竜山に続く稜線の緩やかな巻き道を行く。途中の岩のピークで両側からバツタリと、今回の山行きで始めて人（ご夫婦）に出会う。昨日三条の湯から雲取山に登り、雲取山荘泊、朝六時に出て雲取から飛竜へと主脈を縦走し、これから三条の湯（私の登ってきた道）へ出て、後山林道で車を拾って帰るそうだ。

●ザックを置いて飛竜山頂往復

雲取山山頂を出発した奥秩父縦走路は、北天ノタルを過ぎると、この飛竜山の南面を巻くように付けられている。ちように飛竜権現の前を通って将監峠へと向かう。「飛竜

山」の山頂に登るには、飛竜権現から、登り二〇分、降り一五分を往復する。今回のピーク・ハントはここだけなので、山頂で写真を撮るべく、ザックを置いて空身で登る。ガイドに記されているほど分かりづらくなく、石楠花の満開のときは結構いいかもしれない。

●飛竜山・山頂

山頂は樹林の中で、わずかに南側に視界が開けている程度であり、もちろん、この山だけを対象に登る人は皆無に近い。…とガイドにあったが、結構踏まれており、山頂の展望も、注意して歩けば「富士山・大菩薩嶺」と狭い範囲だが望める。



●ハゲ岩：金峰・国師・甲武信ヶ岳など展望

飛竜山頂往復で飛竜権現に戻り、縦走路を「筈取山」方面へ少し行くと「ハゲ岩」への道標がある。ハゲ岩（名前が好かんね！）からの展望は、北・東側を除き一八〇〜二

五〇度の展望だ。飛竜山頂とセットで見れば金峰山・甲武信ヶ岳に引けを取らない。

奥秩父のここからの縦走路の「将監峠」「唐松尾山」「笠取山」が身近に見える。その先の「雁坂峠」「破風山」「木賊山」そして「甲武信ヶ岳」は山頂が重く垂れ込めた雲間に隠れている。国師ヶ岳・金峰山も同様に雲海に。南の方面の「雲取山」は見えない。石尾根の「七つ石山」や「鷹ノ巣山」が望める。



ハゲ岩で昼食（昨日の残りおにぎり一個）。ガスコンロで餅うどんを作ろうと思ったが、時間や足場の悪さからやめた。小屋から飛竜権現までガイドで約三時間、実際は途中で休みいれて一〇時着なので四時間とまずまず。飛竜山頂往復とバゲ岩での昼食休憩で、一一時三〇分に飛竜権現からの降りに入る。

●ミサカ尾根・サオウラ峠からの下り道

ミサカ尾根は飛竜権現の標高二〇〇〇mから、サオウラ峠の約一四〇〇m間で六〇〇mの降り。前飛竜から熊倉山とその先までがキツイ降りとなる。

新調の登山靴のテストを意識する（大丈夫のようだ）。熊倉山から昨日の撤退地点を通過してなんとか峠に到着。峠には年配のおじさんが、休んでいた。これから三条の湯へ行くそうだ。



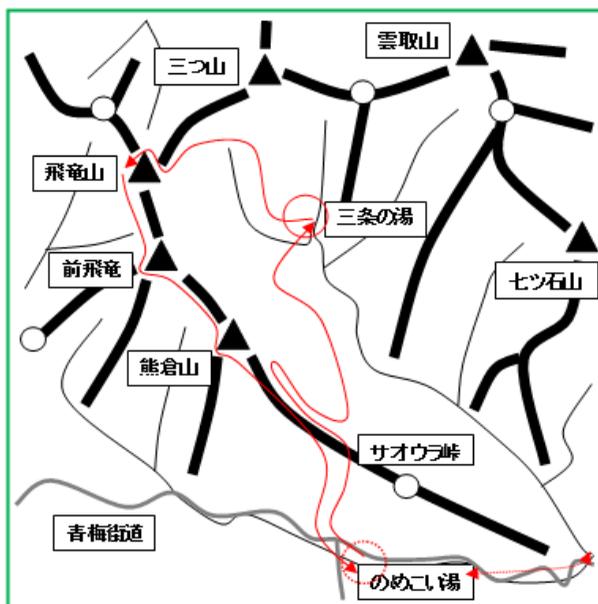
餅・うどん用の水を、腰水筒に移し変えて、サオウラ峠からの八〇〇m標高差の下り道に挑戦する。ガイドでは一時間、小屋番さんは一時間三〇分と言っていたが。峠を一四時三〇分、何度かの休みを入れて、丹波のバス停に一六時一〇分、のめこいの湯駐車場に二〇分着となった。トイレで身体を拭いてさっぱりする。着替えなど帰りの準備。一六時四〇分駐車場出発。

【私の記録】

<丹波から「飛竜山」…2006. 07. 12-13>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

一日目…のめこいの湯=6.40—(1.10)—山王沢=7.50—(1.30)—食事地点=9.20～9.30—(0.50)—サオウラ峠=10.20～10.30—(0.40)—1500m地点=11.10～11.30—(0.30)—サオウラ峠=12.00—(2.10)—三條の湯=14.10(泊)

二日目…三條の湯=6.00—(1.40)—カンバ谷=7.40—(0.30)—北天のタル=9.10～9.20—(1.00)—飛流権現=10.10—(0.20)—飛竜山(2069m)=10.40～10.50—(0.20)—ハゲ岩=11.10～11.30—(0.50)—前飛竜=12.20—(1.10)—熊倉山=13.30—(0.50)—サオウラ峠=14.20～14.30—(1.50)—のめこいの湯=16.20

七、奥秩父の東の雄・都の最高峰の「雲取山」

●奥秩父・東端の「雲取山」、東京都の最高峰

雲取山は「奥秩父」のガイドでも東の雄として紹介され、東京都の最高峰として「奥多摩」のガイドでも紹介される。それだけに登るコースも多岐にわたる。尾根の登りもあり谷・沢沿いのコースもある。人気があるわけだ。

私も若いときに一度登った記憶がある。登山を再開し、「奥秩父プロジェクト」の前の、二〇〇五年の十一月に日原・大ダワ経由で雲取山に登っている。プロジェクトとして集中した〇六年は十一月に「三峰神社から雲取山」（このコースのみ、奥秩父の山行の扱い）、翌〇七年十一月に、「鴨沢から雲取山」、翌〇八年十一月に、「富田新道から雲取山」、小屋に泊まり翌日に大ダワから日原林道に戻った（奥多摩の山行の扱い）（写真・上…山頂・下…石尾根から山頂）。

雲取山があまりにも有名になりすぎて不遇を困っているのが「飛竜山」だろう。標高はこちらの方が僅かに高く、山容も方角によつてはこちらの方が優れる。三条の湯から、雲取山と組み合わせて登ると楽しい。山頂付近の陽流権現の先に「禿げ岩」があり、奥秩父の西の山々が見渡せる。



三峰神社から「雲取山」(〇六年・十一月一五・一六日)

●秩父神社・出発

「二〇〇六年・奥秩父プロジェクト」総仕上げとして、同年・十一月一五・一六日に、北側の三峰神社から雲取山を目指す。普段なら少なくとも今より二・三時間早い出発なのだが、交通の制約で一〇時スタートとなった。和名倉山が正面にどっしり見える。

この駐車場から登山口まで、間違えやすいと「雲取山荘のHP」で警告しているので、確認しながら境内の売店方向へ向かう。売店を左手に見て、雲取山への道標に従い右手の道を行く。すぐにある登山計画書の届出所で提出する。

今日の登山者は今のところ自分だけのようだ。境内のスキの樹林帯を行く。なかなか荘厳な雰囲気だ。HPの注意にあった「鳥居(写真)」を



くぐると、いよいよ三峰神社の「奥宮」妙法ヶ岳へ続く道に入る。登り勾配は増してくるが「信者の往来」があるのか歩きやすい。奥宮の妙法ヶ岳に登るかどうか悩ましいところだ。このときは、先が長いのでま来道を選んだ。

●妙法ヶ岳分岐から地蔵峠

二〇分ほどで妙法ヶ岳への分岐にでる。今回は時間の関係もあり、山頂に行かず巻き道の縦走路を行く。正面からの陽の注ぐ明るい斜面の道を行く。落葉した木立からこれから登る「霧藻ヶ峰」や、「和名倉山」の稜線が望まれる。

四〇分程で妙法ヶ岳からの道を合わせ、登り勾配がきつくなると、小さな御地蔵様の祭られた、「地蔵峠」に出る。この下には三峰神社の駐車場から続く林道が、真下(三峰トンネル)を通り「大血川」へつながっている。登山道からは見えない。峠先には開けた場所があり、再び「和名倉山」の稜線や、振り返ると「両神山」周辺の山々が見える。

●地蔵峠からレリーフ、霧藻ヶ峰

地蔵峠からは稜線伝いにゆったり道を行くと「秩父宮殿

下・妃殿下」のレリーフのある大きな岩のある場所に出る。その先に、霧藻ヶ峰の山頂（写真）があった。

休憩所（小屋：閉まっていた）の前に展望のいいベンチがあり、犬連れの登山者がベンチに寝そべって優雅にパイプをくゆらしていた。ここまでにすれ違った何人・何組かの人たちとは「出会い」で

挨拶してきたが、私がつくと、邪魔されたとばかりに、挨拶もせず出発していった。昼近い時間帯なのでここで、朝の電車の中で食べた弁当の残り半分を頂く。冷たいがまずまず。食事を済ませ出発しようとしていると、三峰口から歩いてきたという青年が到着した。雲取山荘泊まりだという。写真を撮り合う。

●前白岩から白岩山→芋の木ドツケ・大ダワ

霧藻ヶ峰からお清平（お経平）まで下る。明るく開けた笹の鞍部だった。シラビソ・コメツガの樹林帯の稜線を登



り詰めると、肩を経て前白岩山（一七七六m）に到着。展望も樹間からの和名倉山の稜線が見えるだけだった。

さらに登り続けると古びた「白岩小屋」にでた。無人・閉鎖かと思いきや管理人が人影が動くのが見えた（ここは、雲取山荘の新井さんの経営だが）。

ここからきつめの登りが続く。標高が二〇〇〇m近くなり今までとは違う、石楠花が現れ、苔むした倒木、立ち枯れの木々など、奥秩父の深林の様相を呈してきた。小屋から三〇分ほどの登りで白岩山・山頂に到着（午後二時になっていた写真）。

山頂は樹林帯で展望はなく、たたベンチのある一部分が、木々の立ち枯れで明るい場所となっていた。案内板で、台風の影響で針葉樹がなぎ倒され、後から岳樺などが植生してきたのだという（案内板の説明で、状況の理解はできるが：やりすぎの感も）。山頂のベンチでエネルギー補充して



いると、正面の樹間に動くものが居る。ビクツとして凝視すると単独の鹿だ。ジーツとこちらを見ている。逃げる様子もない。写真を撮る余裕も与えてくれた。まもなくゆつくりと木々の間に見えなくなった。

二時を過ぎている。この季節は日没が早いので、四時前に雲取小屋に入りたい。白岩山を下ると、芋の木ドツケを巻くようにして、天祖山・西谷山への分岐に出る。分岐を過ぎると、行く手正面に、雲取山が見え始める。こちら北側（裏側？）から見るのは初めてだ。

一時間掛からずに大ダワに着く。見慣れた風景だ。昨年の丁度今頃、日原林道・大ダワ林道経由で、残雪の大ダワに着いたことを思い出す。そのときは雲取小屋を通過して山頂まで登った。今回は時間的に小屋までだ。

●「雲取山荘」

大ダワから男坂を登り、廃屋を通り抜けると雲取山荘にたどり着く（写真・下）。夕食は六時、朝は五時半だそう。今日の泊まりは二〇人ほど、平日ながら結構泊り客が多い。人気のある小屋だ。昨年の泊まりを機会に送られてきた今年の年賀状を持参、記念品の雲取山荘グッズを頂く。

今回の小屋泊まりで、私の奥秩父プロジェクトのきっかけともなった「東アルプス楽集団・スタンプラリー」のB賞受賞（記念Tシャツと表彰状）の資格が満たされたので、小屋で管理人さんに手続きしてもらおう。小屋主の新井さんには今回も会えなかった。

ひと段落して、ビール＋ウイスキーを作り、玄關脇のストープのある団欒場所、同宿の人たちと語らう。関東からの人が多いが愛知から来たというご夫婦も居た。その後、夕食まで部屋で飲む。

●朝飯・出発準備

コタツがありがたい。小屋泊まりに慣れたのか、ぐっすり寝ることができた。五時には目覚めて荷物など用意する。五時半からの食事で、予定より早く出発できそう。朝食は昨年と同じ、また他の小屋とも同じ。生卵でぶっかけご飯を二杯も食べる。



日の出は六時一五分頃とのことで、小屋前からのご来光は昨年堪能しているのので、予定の六時に出発する。名古屋のご夫婦も同じく出発。昨夜降った「霰・雹？」が、前庭や屋根に真つ白だった。深い樹林の登りを行く。昨年はなかった、登山道を決め付けるロープが設置されており、オーバークースで山が荒らされていることを知る。



●雲取山山頂から三条ダルミ、三ツ山

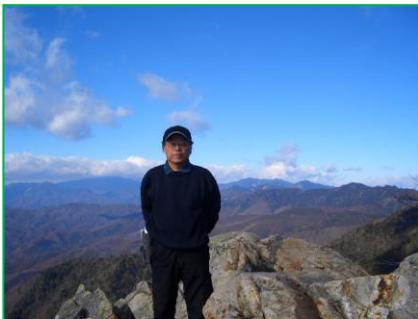
約三〇分、身体も温まった頃に山頂に到着、相変わらず富士山や石尾根、奥秩父の稜線・山々が一望できる。今回も快晴だ。名古屋のご夫婦に写真を撮ってもらい、ここでお別れする（写真：山頂から朝焼けの飛竜山方面）。

ここからは奥秩父・主脈踏破の未知の部分（最終のトレース）に入る。山頂から「三条ダルミ」まで二〇分の急な降りとなる。鞍部で広場となっている三条ダルミで、また

数匹の鹿に出くわす。今回はさっさと逃げられた。三条ダルミからは甲州側の日当たりのいい、木々もまばらで、明るい巻き道を行く。狼平付近の幅広くゆつたりとした笹の稜線や広場を快適に行く。振り返ると、芋の木ドツケから雲取山の山頂・稜線が見える。小さな隆起の続く三ツ山も甲州側を巻いていく。木の間から大菩薩や富士が望めた。

●北天のタル〜飛竜権現・禿岩

三条ダルミから、ジャスト二時間（七〜九時）で、見慣れた北天のタルに出た。時間的に飛竜権現・禿岩の往復が可能か計算し、実行することにした。ここで雲取山頂の避難小屋に泊ったという若者に出会う。記憶ではもう少し近いと思っていたが、深い樹林帯の尾根の側道を五〇分近くかかり飛竜権現の祠の前に出る。飛竜山・山頂はパスして、少し先の禿岩（写真）に行く。



ここは今回で三回目。今日が一番の展望だ。食事・休憩にする。先ほどの若者が来た。飛竜山頂を往復してきたらしい。写真を撮ってもらう。飛竜からの尾根を丹波まで下るという。下山後のバスで再び彼と会う。

●飛竜権現から三条の湯

一〇時過ぎに出発し「北天のタル」に一一時前に着く。ガイドでは北天のタルから三条の湯までは二時間の下り、地図の所要時間は一時間三〇分、実際には一時間少々で三条の湯（一二時少し過ぎ）に着いた。

●後山林道・車に拾ってもらっ

三条の湯から三〇分後山林道にでた。紅葉を見ながら林道を四〇分ほど行く。途中、車で下山中の「伊勢崎からの方」に拾われる。さすがに単調に歩きに疲れが出ていたので有難かった。「御祭」バス停から一三時五五分の奥多摩駅行きに間合う。

■参考：秩父宮レリーフ・「秩父宮」の由来

●霧藻が峰の命名者は「秩父宮」……とある。「昭和八年夏、

両殿下おそろいで奥秩父御登山の折、殿下御みずから命名された霧藻ヶ峰（地元では燕岩といわれていた）に……と、レリーフの下の解説版に記されている。

●何故、「秩父宮」……なのか。秩父宮殿下は大正天皇の第二皇子・淳宮（あつのみや）として誕生、成人と同時に「秩父宮」を創立された。秩父宮記念公園のHPによると、「秩父宮の宮号は、秩父嶺は明治天皇が崇めていらした帝都所在の武蔵国の名山であり、殿下の御住居の西北に位置し、往古日本武尊（やまとたけるのみこと）が奥羽御平定の後、この地方を通られた歴史にちなみ選定されました」とある。さらに「若き日の殿下は様々なスポーツを愛好され、スポーツの宮様」と評されましたが、とりわけ登山とスキー、ボートを好まれ、英国留学中にはマッターホルンに登頂されています」とある。宮号ゆかりの「秩父神社」に合祀されているという。

●「スポーツの宮様」……として。歴史的には、戦前・戦中と「昭和天皇の弟」として激動の時代に翻弄された一面もある。一方で「スポーツの宮様」らしい、大学駅伝などの数々のスポーツ競技の「秩父宮杯」や、秩父宮ラグビー場など、われわれの記憶にもいまだに新しい。

●**疲労と空腹と行動食**：朝の小屋食(一)飯を軽く一杯半と握り一個では、登り降り七〜八時間の山歩きには明らかに足りない。当然、前飛竜の辛い降りで空腹感が強まった。行動食の一口チョコを三〜四個食べてごまかす。水の飲みすぎも疲れやすくなるのかもしれない。

●**三条の湯の由来**：今から余年前、甲州丹波山村字後山の河村源次郎という人が、この山中で狩猟し鹿に傷を負わせ追跡したところ、その鹿が傷を湧き出ている水に浸して、あたかも治療するかの様子であるのを発見した。この水在近在の人が飲んだり、また湯を沸かして入浴すると創傷・冷え性・胃腸病・皮膚病・神経痛・リウマチ等に特効があった。無人の小屋に湯槽が据え付けてあつて誰でも行つて自分で沸かして入るようになっていた。

今般東京都水源林丹波山出張所所長の山路勝輝と木下孟一が山小屋を作り附属浴場を設けこの地に「三條の湯」と名づけて雲取山・飛竜山の登山者、青岩鍾乳洞の見学者等一般に開放することになった(昭和二五年)。(三条の湯のホームページから一部引用)。

●**飛竜山の由来**：雲取山・山頂や石尾根から西方を眺めると、まるで空を翔る竜のごとき山容の大きな山が目の前

に横たわっている。この山こそ飛竜山である。飛竜山という名称はこの山の南の肩に飛竜権現が祀られていることに由来する。飛竜山の名は山梨県側の呼び名である。埼玉県側では大洞山(おおぼらやま)と呼ぶ。この山が荒川の支流大洞川の源頭に位置することによる。

●**飛竜権現の由来**：歴史的に見てこの山は明らかに山梨県側との関係が濃厚である。飛竜山の名前の由来となった飛竜権現社は文明一二年(一四八〇年)、「小菅遠江守信景」によって祀られたものであるという。この社は甲斐国誌にも記載されている(写真・小さな祠)。



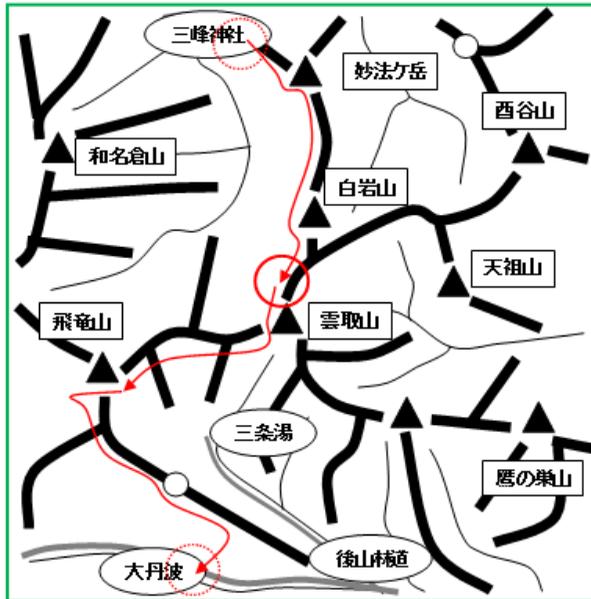
小林経雄著「甲斐の山山」には「飛竜権現への参拝路は、丹波からサオウラ峠に登り、このミサカ尾根をたどつて前飛竜に達しており、明治時代初期まで、祭りには小菅・丹波の村人が大勢登ってきたといわれる」と記載されている(以上：一部引用)。

【私の記録】

<三峰から「雲取山」…2006. 11. 15-16>



●「登山ルート」



●「登山タイム」

一日目…三峰神社(1100m)・鳥居=10.00—(0.20)—妙法が岳分岐—(0.25)—
妙法が岳合流=10.45—(0.35)—地藏峠=11.20—(0.10)—霧藻ヶ峰(1523m)
=11.30~12.00—(お清平經由 1.10)—前白岩山=13.10—(白岩小屋經由 0.50)
—白岩山(1921m)=14.00~14.15—(芋ノ木ドック經由)—(0.45)—大ダワ=
15.00—(0.30)—雲取山荘=15.30

二日目…雲取山荘=6.00—(0.30)—雲取山=6.30~6.40—(0.20)—三条タルミ
=7.00—(狼平・三ツ山經由 2.00)—北天のタル=9.00—(0.45)—飛竜権現・禿岩
=9.45~10.10—(2.00)—三条の湯=12.10—(0.30)—後山 林道終点=12.40—
(歩 0.45+塩沢橋手前から車 0.20)—御祭=13.45

八、奥秩父の周辺の「大菩薩の山々」・「秩父の山々」

●奥秩父と大菩薩峠周辺

大菩薩峠周辺の山域は、奥秩父と一緒にガイドされる場合が多い。位置的には確かに近いし、大菩薩嶺・雷岩から大菩薩峠への南西側の笹原の穏やかな尾根筋は、奥秩父の雁坂峠・雁峠にかけての明るい笹原の稜線に良く似ている。

もう一つは、奥秩父を愛した小暮・田部の両先達が、当時の中央線の「塩山」から笛吹川方面や、この大菩薩峠の甲州側の入口の裂石を通って柳沢峠に出て、さらに一ノ瀬高原を経由して雁峠・笠取山・唐松尾山・将監峠と訪れている…：当然、大菩薩周辺の山々も頻繁に訪れていた…：という歴史的経緯も考えられる。奥秩父と切り離しても、大菩薩から小金沢山、さらに中央線近くまでの山並みの縦走は、富士山を真正面に見て、南アルプスを右手に見て、快適な歩きができる。

大菩薩峠は、昔（一〇代後半ないし二〇代前半）登った記憶がある（写真・下…：大菩薩峠から大菩薩嶺方面、写真上・大菩薩嶺山頂）。しかも、登山道のどこかで昼寝して、帰りの時間を大幅に狂わせた記憶がある。高校の仲間のS君と一緒にだったと思うが、彼も記憶がはっきりしない。



介山荘から小金沢山（二〇〇六年一月一〇日・一一日）

●春の敵討ち・スタンプラリーのため

大菩薩へは、二〇〇六年の春に来ていた。雪の富士山や南アルプス・奥秩父の展望期待で、新しく買った「双眼鏡」のテストをしたかった。しかし、「霧なのか霞なのか」足もとに陽が注いでいるのに、遠くは全くボヤけて見えなかった。だが、明るい美林の尾根筋や、開けた笹の草原は、今までの奥多摩にはない良さを感じさせてくれた。

大菩薩はこのように独自の魅力を持っているが、私の奥秩父プロジェクトの計画・実行の範囲ではなかった。今回は、奥秩父・スタンプラリーで両神山の予定が、管理人の下山日で泊れず、予定変更し、スタンプラリーに含まれる大菩薩の山小屋（介山荘）を加えた。〇六年の秋に実行に移した。大菩薩峠周辺だけ出は小屋泊まりでは物足りないので、小金沢山方面へも足を伸ばすことにした。

●アクセス・ベースの環境

二〇〇六年一月一〇日（〜一一日）、自宅を四時半に出て、馴染みの新青梅街道・吉野街道・青梅街道で、奥多摩

湖・柳沢峠・裂石経由で、林道に入り上日川峠の駐車場に着く（八時過ぎ）。

柳沢峠から裂石への降りで見えた富士山の雪化粧が紺碧の空に浮き上がりとてもきれいだった。

●大菩薩峠・介山荘

駐車場から、福ちゃん荘

まで春と同じ道に行く。新緑がきれいだった春とは違い、カラマツの紅葉も時期ハズレなのか冴えない。それでも落ち葉の絨毯を歩くのは心地よい。福ちゃん荘で年配のご夫婦に会う。カラマツ尾根から大菩薩嶺へ登られるとのこと。私は大菩薩峠に直接続く車の通れる林道に行く。介山荘で車を見たのでそこまで通じているようだ。途中、富士見小屋（営業していなかった）があり、その展望テラスから、富士山（写真）が美しい姿を見せていた。

富士の前衛の山は何処だろう…。御坂山塊のようだ。地図で確認すると、左が三つ峠山、御坂峠を挟んで、黒岳・



十二ヶ岳・節刀ヶ岳の稜線のような(約一五〇〇〜一七〇〇mの標高)。さらに、もう一軒の小屋(勝縁荘?)を過ぎ、林道は狭くなり、急な勾配も出てきた(軽なら通れるか)。さすがにへばり始めた頃、発電のディーゼルの音が聞こえ介山荘の裏手に出た。

● 介山荘から石丸峠・狼平

峠からは大菩薩嶺への稜線、奥秩父から南アルプス、反対側は、雲取山からの石尾根や三頭山など奥多摩三山が見える。小屋の親父にザックを預け、サブザックの身軽ないでたちで、小金沢山を目指す(九時四〇分)。小屋裏からの熊沢山の登りは北側になり、春には、雪と氷の世界でえらく難儀した記憶がある(それで軽アイゼンを買った)。今回は雪も凍りもないが陽が指さず寒い。こんなに長かったかと思いはじめ、明るい稜線に出て、道標でここが熊沢山・山頂と知る。ここから石丸峠(写真)まで、



大菩薩らしい、甲州側が明るい笹原の開けた稜線(防火帯)、反対側は針葉樹の深い樹林帯の下りが続く。

● 狼平から小金沢山

石丸峠から、上目川峠への道を右に分け、さらに牛ノ寝通りへの道を左に分け、ひとピーク越えると「狼平」の標識のあるただっ広い笹原に出る。この辺は背丈ほどある熊笹(?)の密生地、腕を頭に乗せ身体で笹をより分けるように進む。足元が見えず危うい。この笹の草原を過ぎると再び樹林帯に入る。

登りがきつくなると小金沢山(雨沢の頭)二〇一四m(写真)・山頂にひよっこり出る。南アルプス・富士山・奥多摩方面と、今来た北側を除く、一八〇度以上の展望が開ける。これからさらに辿る稜線も見える。食事は折り返し最終地点の、牛奥ノ雁が腹摺山で頂こうと、写真だけにして出発する。



●牛奥ノ雁ヶ腹摺山

小金沢山から牛億ノ雁ノ腹摺山へは、ガイドでは一時間弱の行程だが、三〇分と思ったより早く到着した。日川ダムのある甲州側が明るく開けており、奥多摩川が森林帯になっている。丁度一二時で、ここからは折り返しとなるので、ゆっくり食事をとる。今回は、青梅市外コンビニでの焼肉弁当で、冷たくなっているが結構おいしく頂く。風は強くなく日差し一杯で暖かい。

●山頂・素晴らしい南アルプス

山頂からは、南アルプスが遠望できる(写真)。地図と双眼鏡で、右手から、南ア北部の甲斐駒・手前の鳳凰三山・奥の北岳など白根三山、それから塩見岳がポツンとあり、荒川三山・赤石岳、そして最も左手に聖岳と三〇〇m級の峰々が連なっている。このように南ア全体を見るのは初めてだ。夏の北

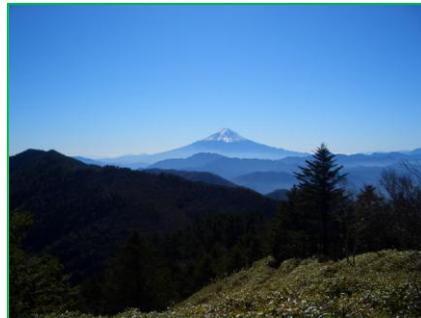


岳・山頂からは塩見・荒川三山から先は望めなかった。仙丈や甲斐駒では霧のため展望は望めなかった。じっくりと舐め回すようにみる。

この先に続く黒岳の向こうに、富士山がより身近にその容姿を見せてくれている(写真)。今日は快晴で全く雲が出てきていない。この季節から冬にかけて、このように澄み切った撮影日和となるのだろう。南アといい富士といい、富士の前衛の山々といい、重層的な山容の連なりに時間の過ぎるのを忘れる。

●牛奥ノ雁ヶ腹摺山から小金沢山・介山荘

一二時時半には雁ノ腹摺山を出発、一時少し過ぎには小金沢山に戻り、この山頂では、丹波の里の向こうに、奥秩父の七つ石から鷹ノ巣山の石尾根の稜線(雲取山は見えず)、小菅の里の向こうに三頭山などの奥多摩三山、さらに



道志山塊・丹澤山塊が望める。一時半まで山座同定に専念する。小金沢山からは樹林帯・笹原の来た道に戻り狼平に到着する。笹原の開けた稜線では道が何本にも分かれており、背の高い笹の深いブッシュに迷い込んだりした。鞍部の石丸峠に戻る。

ここからは介山荘まで三〇分程度、二時半とまだ時間が早い石丸峠で昼寝する。ここは切通しで風が強くさすがに寒くなってきた。でも、今日は今までの山行と違い、なんともユツタリペースだ。景色がよいせいもある。

熊沢山への開けた笹原の登りが今日最後の最後のお勤めだ。さすがに足に乳酸を感じる。峠風の山頂から再び深い樹林帯の降りに入る。木々の根が張り出しておりなかなか歩きづらい。やつとこのことで介山荘の屋根が見えてきた。

●宿泊環境・今回は「介山荘」

介山荘の表（登山道沿い）は、みやげ物の店の作りで、宿泊者は横手に少し下ったところに入口があった。中は意外と広い。灯油ストーブで土間も暖房されていた。暑いくらいの団欒の部屋に通される。食堂と寢室は別の部屋となっていた。

今日の泊まりは単独者ばかりの四人。お馴染みらしいアマチュアの写真家、北ア・薬師岳で遭難・凍傷になり手の指をなくした人、小金沢山へ行くという年配の登山者、そして私だ。

介山荘（写真）の親父さんは話し好きだ。夕食までの一杯の時間、夕食のとき、小屋の名前の由来や、その中里介山にまつわる話など、自分の家族の話（息子さんが後継ぎ）尽きない。どこの小屋主も離し好きだが、この親父は別格。親父の話に夢中で、日没の時間が過ぎてしまった。あわてて外に出る。それで撮ったのがこの写真。南アルプスの稜線に日が落ちていた。夕日に富士山が赤みかかって浮かんでいた。

●朝飯・出発準備

峠での日の出は六時過ぎとのもので、他の三人で写真撮影に外に出る。夕べの日の入りは南ア方面、今朝の日の



は奥多摩・丹澤方面だ。夏は北岳・肩の小屋での日の出を思い出す。ここも決して劣らない（写真）。拝みたくなるような神々しさだ。富士に朝日の紅が差ししてくる。

●大菩薩峠から大菩薩嶺

今日は、超ゆとりの出発。普段では考えられない七時少し前の小屋の朝食。七時二〇分に小屋を出た。汗をかかない程度にゆっくりと登る。春のときは全く逆のルート取りとなった。幾つかのアツプダウンはあるものの高低差は少なく、甲州側（左手）に開けた笹原のなだらかな稜線を行く。まだ朝早いせいか、同じ方向の人が一人、すれ違いの人が一人、の静かな歩きだった。



奥秩父方面の展望は大菩薩嶺の右手は雲取山（見えない）からの「七ツ石尾根」の稜線、さらに奥多摩の三頭山・御前山・大岳山が望める。左手は、甲武信ヶ岳以西の主脈が望める。雷岩には八時一〇分、大菩薩嶺には八時二〇分大

菩薩峠から一時間しかかからない。春には雷岩から大菩薩嶺までの樹林帯で、陽が射さず氷が張っている箇所があった。誰も居ない山頂で記念撮影し戻る。

●唐松尾根を上日川峠まで

雷岩でゆっくり秀峰富士を眺める。行動食を少しとり九時には降りにかかる。唐松尾根はその名のおり、カラマツの美しい森だが、その紅葉は時期が早いのか、最盛期を過ぎてしまったのか、期待した艶やかさはなかった。春のときは緑の森の道だったが、この季節、落葉した木立からの明るい日差しが満ち溢れた道となっていた。福ちゃん荘に近づくとタクシーが数台、登山者が大勢、登り支度をしていた。

●帰り道：昼飯を「作場平」で

柳沢峠から犬切峠を経て一ノ瀬高原の「作場平」の駐車場で昼飯を食べる。この林道は狭い箇所もあり、迷いそうな分岐もあるが、将監峠・唐松尾山から笠取山・雁峠に連なる稜線が一望できる、素晴らしい景色の場所もある。作場平でランチタイム（一一時半～一二時）、「うどん餅スーブ」を作り満腹になる。

上日川峠から「大菩薩峠」(二〇〇六年四月一八日)

●上日川峠・駐車場

二〇〇六年四月一八日、林道が先週開通(四月八日)してとのことで、計画実行した。峠の駐車場に着くと、平日にもかかわらず既に一〇台台近くの車があった。私が準備している一〇分間に、三台も続けて到着した。道中混みそう…。先週から雨続きで皆待ち焦がれていたのだな…と思つた。長兵衛ロッジから福ちゃん荘までは登山道(写真)を行く。奥多摩とは異なりスギやヒノキの常緑樹の暗い樹林帯でなく、ミズナラ・ブナなどの落葉樹の明るい樹林帯を登る。



●カラマツ尾根から大菩薩嶺

福ちゃん荘からは、唐松尾根を雷岩・大菩薩嶺を目指す。唐松尾根というだけに、ミズナラ・ブナとともに、マツの

中で唯一の落葉樹というカラマツが増えてきた。さらに、唯一の緑(常緑)のコメツガ(…だと思ふ)が点在している。タケカンバ・シラカンバが混生した場所もあった。笹の群生している雷岩付近まで、この明るい美しい森林帯に登山道がある。

今回は、新しく買った「双眼鏡」のテスト(雪の富士山や南アルプス・奥秩父の展望期待で)も目的のひとつだった。しかし、写真にみられるとおり「霧なのか霞なのか」足もととは陽が注いでいるのに、遠くは全くボヤけて見えない。その代わりではないにしても、明るい美林の尾根筋や、開けた笹の草原は、今までの奥多摩にはない良さを感じさせてくれた。雷岩から大菩薩嶺までの樹林帯には二〇〇mの標高を思わせる氷が張っていた。

●雷岩から大菩薩峠まで

雷岩まで戻り、大菩薩峠を目指す稜線は、右側(南)が笹の平原状で、左側(北)がカラマツなどの樹林帯となっている。笹の登山道は奥多摩には少ない(昨秋からの登山では見当たらず)、記憶では「丹沢山塊」にあったように思う。いずれにしても、明るくて開放的なルートだ。神戸岩や、賽の河原からの親不知の頭など、多少の上り下りはあ

るものの全く苦にならない。これで、遠望さえ利けば最高のルートだったろうに：残念（写真）。

果たせぬもう一つのテスト：双眼鏡のテストは展望がなく残念。もうひとつ、今回の参考で「山用コンロ？」の屋外テストをしたかった。お湯を沸かして昼のおにぎり用の味噌汁（インスタント）を作る予定だったが、この大菩薩ルートでは適当な場所がない。稜線は笹の平原状が続ぎ、登山道はロープで制限され、炊事場所探しがまま成らなかった。人通りが多かったせいもある。



●大菩薩峠から石丸峠

大菩薩峠のパノラマ（展望盤？…：山座同定盤？）によると、北側は奥多摩の石尾根、南側は奥秩父から南アルプス・富士山、丹沢山塊が一望できるとある。峠の介山荘は営業していた。時間も一一時ちょい過ぎで、先着のご夫婦がべ

ンチで食事中だったこともあり、そのまま通過して石丸峠を目指す。峠から熊沢山の登りは、北面になり登山道が氷結していた。先発の年配者は悪戦苦闘、私も木の根や草地を選びながら登ったが、大菩薩嶺の凍った道よりも、こちらの方が、登り勾配がきつく、苦戦を強いられた。石丸峠からの上日川峠への下り（尾根をトラバース気味に）は、カラマツ・コメツガの混生樹林帯を快適に辿った。

今回の「大菩薩峠・周辺」は、昔と違い「裂石」（今の大菩薩登山口・青梅街道沿い）からの歩きでなく、上日川峠（一五八〇m）まで舗装林道の自動車利用となっている（中央道・大月ICから日川ダム経由もある）。青梅街道の柳沢峠（一四七〇m）よりも高く、裂石（登山口・八九〇m）とは約七〇〇m近い標高差がある。

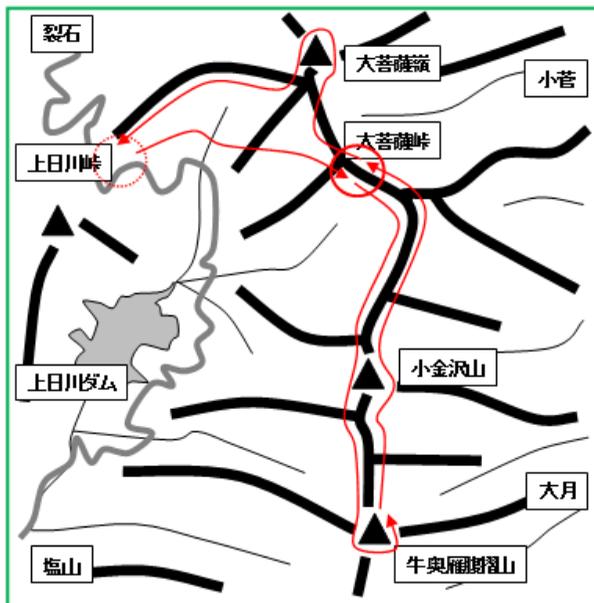
ガイドによれば登りで二時間強、下りでも一・五時間の所要時間とある。下から登れば丸一日の行程となるが、上日川峠からの行程では時間的にも高低差でも、約半分ですむことになる。駐車場は第一（三）（約一二〇台）まであり、公営なので無料。

【私の記録】

<大菩薩峠から「小金澤山」…2006. 11. 10-11>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

一日目…上日川峠=8.10—福ちゃん荘經由 1.20—大菩薩峠・介山荘=9.30~9.40
—石丸峠—2.00—小金澤山(2014m)=11.30—0.30—牛奥ノ雁ヶ腹摺山(1995m)=
12.00~12.30—1.00—小金澤山=13.10~13.30—1.45—介山荘=15.15

二日目…介山荘=7.30—賽の河原 0.40—神戸岩=8.10—0.10—雷岩=8.20~
8.30—0.10—大菩薩嶺=8.40—0.10—雷岩=8.50~9.00—唐松尾根・0.40—
福ちゃん荘・0.20—上日川峠=10.00・駐車

日向大谷から「両神山」

(二〇〇八年五月三日)

●登山口までのアクセス

二〇〇八年五月二三日、自宅を五時出発予定が、例によって早起きし四時半に出発、花園ICで降りて長瀬まで順調に走行、長瀬の先で「小鹿野町」への道標に導かれ右折する。どこかで間違え「藤岡市」の表示がある。やっと国道四六二号線に出て、神流湖方面へ走った。二九九号線の志賀坂峠まで行かず、手前の「土坂峠」へ行く県道を走りやっと小鹿野町へ着く。既に七時過ぎていた。小鹿野町からは案内に従い迷うことなく日向大谷に着いていた。登山口近くの第一駐車場は満車、第二駐車場に愛車を止める。

●両神山荘から八海山

予定より四〇分遅れの七時四〇分に出発、民宿の前の道に行く。真下に見える駐車場から団体さんが準備体操



をしていた。こちらの方が先行できそうだ。「会所」までは植樹帯の薄暗い道に行く。七滝沢の分岐「会所」の下のベンチで朝食とする。そこからは薄川沿いの新緑が映える岩道に登る。ガイドではここから一時間で「八海山」そこから三〇分で「清滝小屋」とある。

沢沿いの道は新緑の影を行く感じで、直射日光も当たらず快適な歩きだった(写真・上)。八海山という名からピークを想像したが、石像のある斜面の折り返しだった。

●八海山から清滝小屋

ここからの清滝小屋までの道が長かった。沢筋からは離れて暑さがみにしみてくる。スポドリを飲むように心がける。尾根筋の稜線が狭まり、枯れ沢が「源流近し」を思わせ、空が身近に感じるようになると、清滝小屋(写真)が見えた。小屋の前を通り、ベンチのある休憩ところで、二回目の食事とする。



小屋の前に「石楠花」が一株咲いていた（後にも先にもここだけだった）。水場がありおいしかった。ここで先行者（男性一人と女性二人）に出会い、彼らが出発した後、別々に二人の男性が登ってきた。平日なの人が多い。

●小屋から両神神社

清滝小屋の裏手から鈴が坂までジクザクのキツイ登りが続く。後からの同じ年ぐらいの男性二人に追い越される。鈴が坂で七滝沢への道を分ける。「産泰尾根」に登るとやっとならぬ尾根筋（天理尾根）が見通せるようになった。目前は両神山のピーク（剣が峰と前東岳）と思われる。岩場や鎖場が多くなり、変化に富んだ登りとなった。疲労がピークに達したころ両神神社に着いた。ベンチがあり暫し休む。

●両神山・剣が峰

神社からは、高低差のない尾根筋のような道を進む。先行者が下山してくる。山頂直下の岩場・鎖場を登るとそこに山頂があった。祠や石像があり信仰登山の多いことを思わせる。岩場のピークのある狭い山頂だ。山座同定盤もあり、周囲三六〇度の展望だがこの日は春霞で冴えない。先

行者が何組も居り、落ち着く場所がない。早々に下山する（写真）。

●七滝沢ルートで下山

両神神社のベンチで昼食とする。ピリ辛の冷やしラーメンだったが失敗：折角冷やし効果は出でいたのに不味かった。団体客が同じようにここで食事とのことで早々に出発する。七滝沢沿いは昔言われた難しい所はなく、岩場・鎖場はあったが道標も多く、新緑の中快適に歩けた。



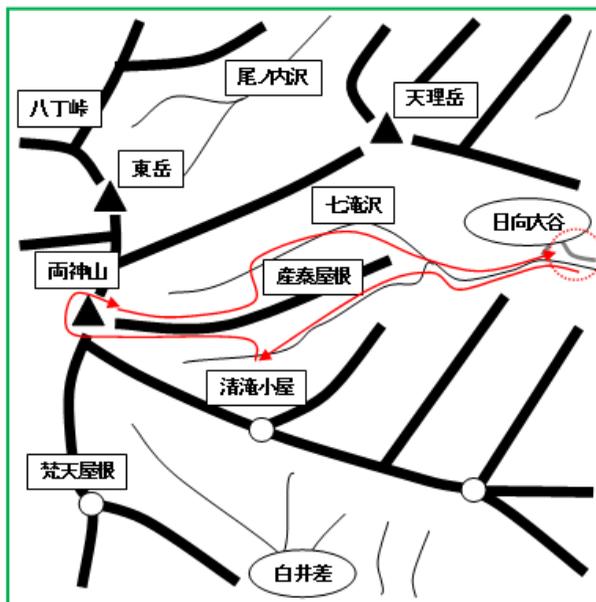
両神山は「花」の季節だった。ツツジ科のヤシオツツジの「アカヤシオ」や「シロヤシオ（冒頭写真）」が咲き誇っていた。シロヤシオは初めて（皇太子夫妻の愛子さまの”お印”だそうだ）。その他には「ニリンソウ」「キジムシロ」「アズマシヤクナゲ（≡清滝小屋の前に一本だけ咲いていた）」、さらにはじめて見た「ヒイラキソウ」もそこかしこに紫色の花を咲かせていた。

【私の記録】

<日向大谷から「両神山」…2008. 05. 23>



● 「登山ルート」



● 「登山タイム」

往路…駐車場=7.40—(0.30)—会所=8.10—(1.10)—八海山=8.20—(0.30)—
清滝小屋=10.10—(0.20)—鈴坂=10.30—(0.50)—両神神社=11.20—(0.40)—
剣ヶ峰 1723m=11.50~12.10

復路…剣ヶ峰=12.10—(0.20)—両神神社=12.30~13.00—(1.00)—鈴坂=13.15
—(1.00)—七瀧澤・木橋=14.15—(0.40)—会所=14.50—(0.30)—駐車場=15.20

